

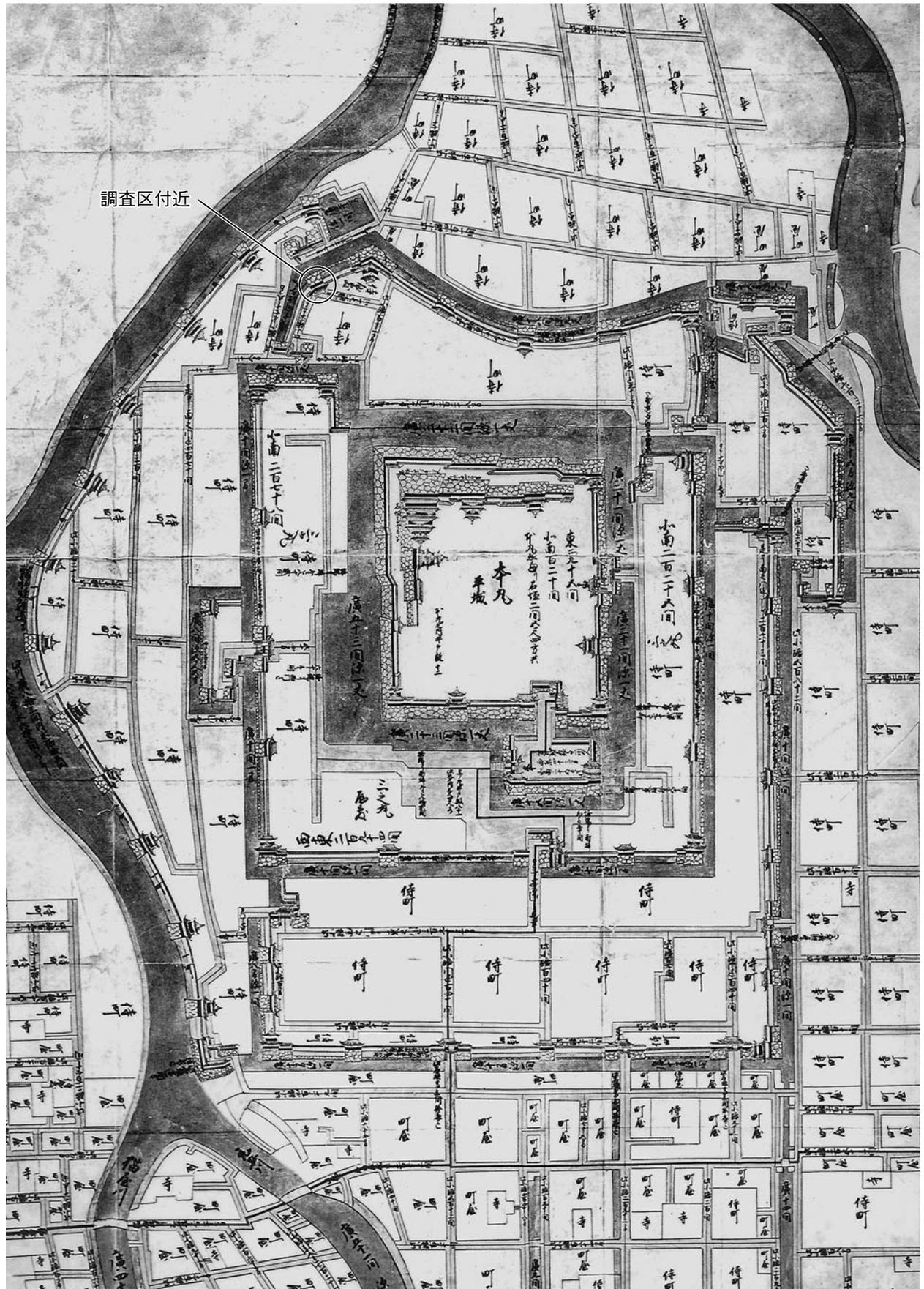
広島城遺跡

西白島地点

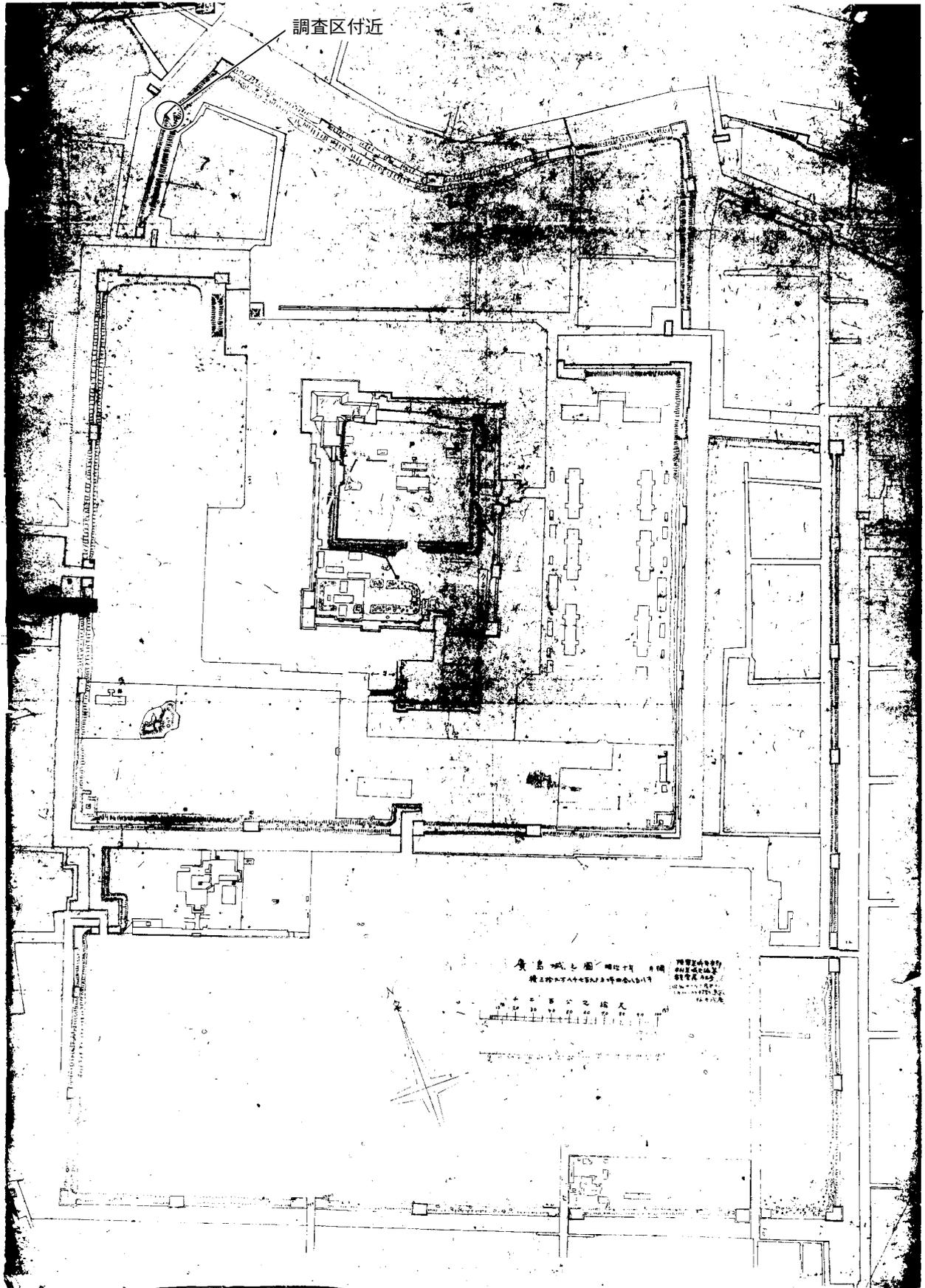
—広島市中区西白島町所在—

2005

財団法人広島市文化財団



『安芸国広島城所（絵図）』（部分） 独立行政法人国立公文書館蔵



『広島城之図』 坪井欣也氏蔵



広島城三の丸南面の様子（古写真・部分） 財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所蔵
元治元（1864）年に前尾張藩主徳川慶勝が撮影したもの。堀に面して櫓等が建ち並ぶ姿は、
本遺跡の旧状を知る上で参考となる。

は し が き

広島城は、今からおよそ400年前、中国地方一円を治めた大名毛利輝元によって築られました。太田川の河口に発達していた三角州上に、大規模な土木工事の未完成した城郭は、周囲を圧するほどの威容を誇っていたことでしょう。また城郭の周りにつくられた城下町は、やがて西日本有数の賑わいをみせるようになり、今日の広島の発展の礎となりました。しかし明治維新以降、時代の流れの中で天守閣や櫓等の建物群や石垣・堀といった城郭の構造物は次第に失われていき、現在目にするのできる石垣等は城郭全体のごく一部分に過ぎません。しかしこれらの石垣は、私たちの郷土広島の歩みを見つめ続けてきた、まさに“歴史の証人”とも言えるものなのです。

今回の発掘調査では、アスファルトの下から広島城の石垣が姿を現しました。一見現代の真新しいコンクリートジャングルのように思える街角ですが、その足元に過去の歴史遺産が静かに眠っていたのです。歴史の積み重ねの上に現在の私たちの暮らしがあることを、まさに実感できた瞬間でした。実はこうした事例は、広島城関連のものだけでも枚挙に暇がありません。このような古の先祖たちの営みに思いを馳せ、かけがえのない郷土の歴史への理解を深めるために、本書をご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査にあたってご指導、ご助言をいただきました諸先生方、ご協力いただきました関係諸機関・関係者の皆様、並びに悪天候や湧き水等に悩まされながらも最後まで発掘作業に従事していただいた臨時作業員の方々に厚くお礼申し上げます。

平成17(2005)年3月

財団法人広島市文化財団

例 言

1. 本書は、広島市中区西白島町23番2, 3, 4号におけるマンション建築事業に伴い、平成16年度に実施した広島城遺跡西白島地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、章栄不動産株式会社から委託を受け、財団法人広島市文化財団が実施した。
3. 本書の執筆及び編集は稲坂恒宏が実施した。
4. 遺構の写真測量及び図面作成は、株式会社計測リサーチコンサルタントに委託した。遺構の写真撮影は、高下洋一・稲坂が実施した。また遺物の実測・写真撮影及び図面の製図は、高下が実施した。
5. 本書に掲載した挿図の方位は、第1図を除きすべて座標北である。座標は日本測地系に基づく平面直角座標第Ⅲ系による。
6. 水平基準は海拔高であり、T.P.(東京湾平均海面標高)による。
7. 第1図は、広島市都市整備局都市計画課発行の2,500分の1の地形図を複製して使用した。
8. 陶磁器・土器の色調は、日本色研事業株式会社『新版標準土色帖(26版)』(2004年)によった。
9. 本発掘調査の調査記録及び出土遺物は、広島市教育委員会からの委託を受けて、財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課において保管している。

目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	2
III 遺構と遺物	8
IV ま と め	23

遺 物 観 察 表

第1表 陶磁器・土器観察表	14
第2表 軒平瓦観察表	15
第3表 軒丸瓦・丸瓦観察表	15
第4表 鬼瓦・鯪瓦観察表	15

挿 図 目 次

第1図 広島城遺跡西白島地点周辺遺跡分布図	3
第2図 広島城遺跡西白島地点調査区位置図	7
第3図 遺構実測図（平面図及び断面図）	17
第4図 遺構実測図（立面図）	18
第5図 広島城遺跡西白島地点出土遺物実測図（1）	19
第6図 広島城遺跡西白島地点出土遺物実測図（2）	20
第7図 広島城遺跡西白島地点出土遺物実測図（3）	21
第8図 広島城遺跡西白島地点出土遺物実測図（4）	22

図 版 目 次

巻頭図版1 『安芸国広島城所（絵図）』（部分）	
巻頭図版2 『広島城之図』	
巻頭図版3 広島城三の丸南面の様子（古写真・部分）	
図版扉 広島城遺跡西白島地点全景	
図版1 a 広島城遺跡西白島地点遺構検出状況（北東から）	
b 広島城遺跡西白島地点遺構検出状況（北西から）	
図版2 a 櫓台北東面石垣検出状況（北東から）	
b 櫓台北東面石垣完掘状況（東から）	
図版3 a 櫓台北東面石垣完掘状況（北から）	

- b 櫓台北東面石垣根石張り出し状況（北から）
- 図版 4 a 櫓台北西面石垣完掘状況（北西から）
b 櫓台北西面石垣完掘状況（西から）
- 図版 5 a 土塁完掘状況（北西から）
b 土塁完掘状況（北東から）
- 図版 6 a 用途不明石列完掘状況（北西から）
b 用途不明石列完掘状況（北東から）
- 図版 7 a 墨書石 a
b 墨書石 b
- 図版 8 a 墨書石 c
b 墨書石 c 下の墨書石
- 図版 9 広島城遺跡西白島地点出土遺物（1）
- 図版10 広島城遺跡西白島地点出土遺物（2）
- 図版11 広島城遺跡西白島地点出土遺物（3）
- 図版12 広島城遺跡西白島地点出土遺物（4）

I はじめに

広島市教育委員会（以下「市教委」）は、平成16年4月26日に章栄不動産株式会社（以下「章栄不動産」）から、（仮）フローレンス西白島グランドアーク建築工事予定地内における埋蔵文化財の有無並びに取り扱いについて照会を受けた。市教委はこれを受けて、同年5月11日に事業地内の試掘調査を行った結果、広島城跡に関連する石垣等の遺構が存在することを確認し、同年5月20日にその旨を章栄不動産に回答した。以後、この遺跡の取り扱いについて両者は協議を重ねたが、計画の変更は難しく現状保存は困難との結論に達し、発掘調査を実施し記録保存の措置を講じることとなった。

そこで章栄不動産は、同年6月17日に財団法人広島市文化財団（以下「文化財団」）に対して、広島市中区西白島町23番2，3，4号に所在する広島城跡関連遺構を調査対象として発掘調査を依頼した。これを受けて文化財団文化科学部文化財課では、同年9月1日から10月28日まで現地調査を実施し、同年11月から12月にかけて遺物等の整理作業及び発掘調査報告書の作成を行った。

発掘調査の関係者は、下記のとおりである。

調査委託者 章栄不動産株式会社
調査主体 財団法人広島市文化財団
調査担当課 財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
調査関係者 吉中康磨 理事長
沼田眞之輔 文化科学部長
幸田 淳 文化財課長
若島一則 文化財課主任指導主事
波田秀穂 文化財課主任
調査担当者 高下洋一 文化財課学芸員
稲坂恒宏 文化財課学芸員

調査補助員（50音順）

（発掘調査） 大利春枝 久保陸郎 山王哲司 品川治駿 谷口敏枝 舛田愛子 森田信枝
門出俊之 八木康子 養祖義彦

（整理作業） 稲坂路子 酒本由理郁 菅原彰子 住川香代子 野田希和子 橋本礼子

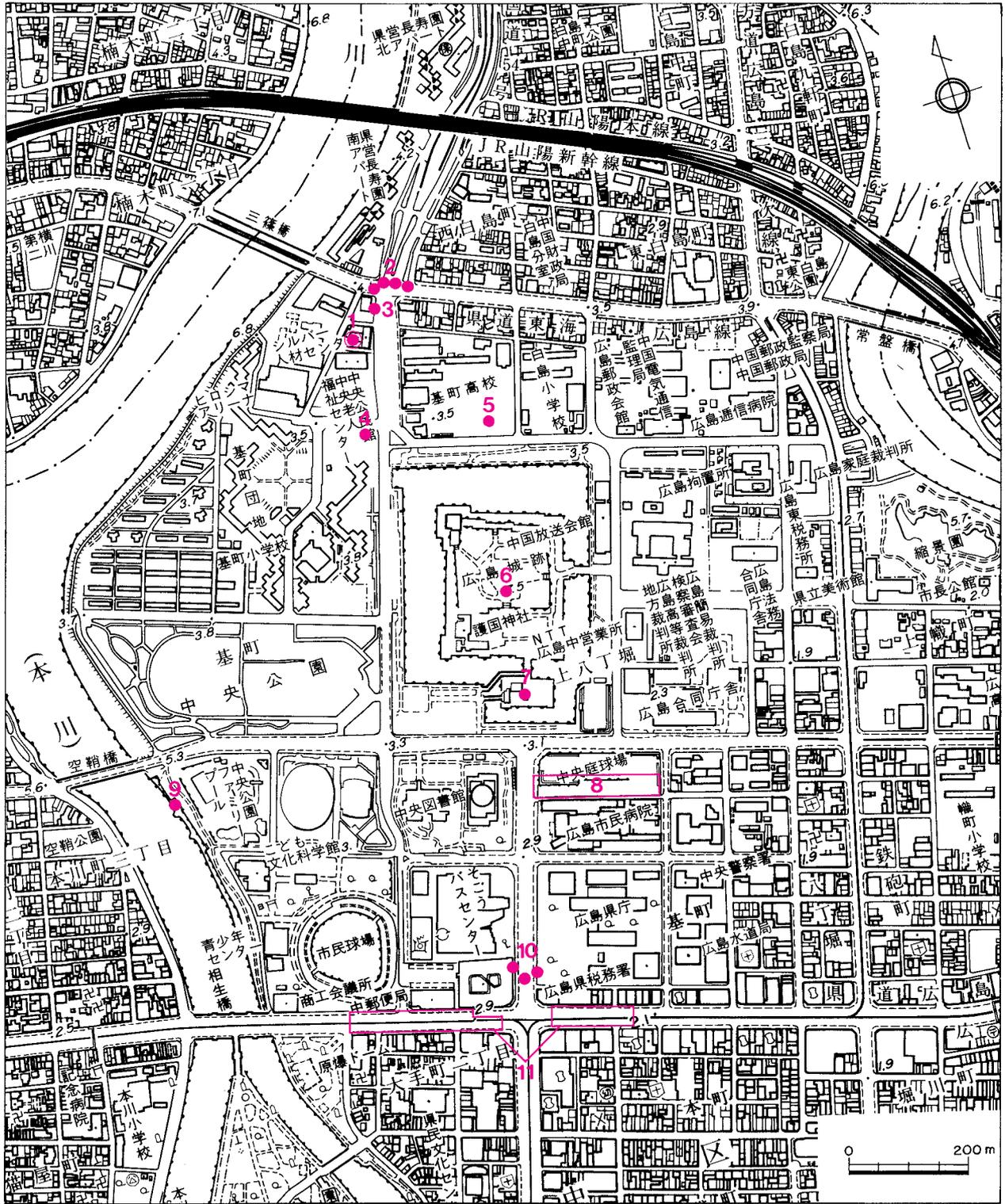
なお発掘調査を進めるにあたっては、章栄不動産及び中国新聞社を始めとする各関連企業のご担当の方や、広島市教育委員会生涯学習課文化財担当・財団法人広島市ひと・まちネットワーク広島市中央公民館及び社団法人広島市シルバー人材センターの職員の方、また地元住民の皆様を始め様々な方に多大なご配慮とご協力をいただいた。さらに、調査の過程や報告書作成に際しては、当財団埋蔵文化財発掘調査指導委員会委員である広島大学名誉教授潮見浩先生、同川越哲志先生、同河瀬正利先生及び広島大学大学院教授古瀬清秀先生の諸先生方からは貴重なご助言、ご指導をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

Ⅱ 位置と環境

本遺跡は広島市中区西白島町23番2，3，4号に所在しており，近世城郭である広島城に関連した遺跡である。

広島城は，中国山地に流れを発した太田川が，瀬戸内海へと流れ込む河口一帯に形成した三角州上に築かれている。この三角州地帯は，現在では太田川の6筋の分流によって5つの島状に分割されており，城域はその内の京橋川と太田川（本川）及び元安川とに挟まれた州の北寄りに位置している。往時の広島城は，東西・南北ともにそれぞれ1km余りの広大な敷地面積を占めていたが，三角州という地勢特性からその城域内の地面の高低差はほとんどなく，いわゆる「平城」の形態をとっている。

この広島城を築いたのは，地域の国人領主から中国地方の大半を支配するまでに勢力を伸ばした戦国大名・毛利元就の孫輝元である。天正17（1589）年には築城工事が開始され，海岸沿いの寒村に過ぎなかった太田川河口の地に，時代の最先端をいく大城郭が次第に姿を現していった。工事はかなり急ピッチで進められ，2年足らずの間に輝元を迎えられる程度にまで体裁が整ったようである。文禄元（1592）年には，秀吉が朝鮮出兵の指揮をとるために九州へ向かう途上で広島城に立ち寄り，城郭の出来栄えについて賞賛している。輝元はその後慶長5（1600）年の関が原合戦の敗戦により長門・周防（現在の山口県）へ転封されるが，広島城の整備はその直前まで続けられていたようである。毛利氏に次いで，合戦で戦功のあった尾張（現在の愛知県）の福島正則が広島城に入った。正則は入城早々に広島城の改修に着手する。毛利氏時代には不十分であった城郭の外郭部分に櫓や門・堀等を構築し整備を図るとともに，三角州上の平城という立地から繰り返されてきた洪水の被害に対処するため，城北方面の堤防補強や本丸・二の丸等の石垣の修築を実施した。こうした大規模な工事によって広島城は面目を一新し，同時に進められた城下町の整備と相まって広島城域は近世城下町としての体裁を完成させたものといえる。しかし正則のこうした動きは、『武家諸法度』等によって諸大名の城郭普請に神経を尖らせ始めた江戸幕府には快く思われず，やがて正則は城郭の無断修理を口実に改易されるに至ったことは良く知られている。元和5（1619）年，正則改易後の広島には紀伊（現在の和歌山県）から浅野長晟が入封した。これ以降明治維新を迎えるまでの約250年間は浅野氏による治世が続いたが，この間は幕府の厳しい統制により新城郭の建造はもちろん既存城郭であっても修復以外の新工事は禁止された状況であった。広島城においても結構を変更するような大規模な改築は行われず，専ら洪水・火災・地震等による被害や老朽化に対処するための復旧工事が連綿と続けられ，外容維持が計られたのである。明治維新を迎えると広島城は政治的中枢としての機能を失い，広大な城域内の建物群や堀・石垣・土塁等は無用の長物として随時撤去され，次第に軍用地や市街地へと変貌していった。そうした中，内堀に囲まれた本丸及び二の丸部分は，陸軍による石垣等の改変箇所が数多く見られるものの天守閣を始め数棟の建物が現存し旧状を良く残していたが，これらも昭和20（1945）年の原子爆弾により灰燼に帰してしまった。現在では，本丸・二の丸及び内堀が“史跡広島城跡”として国の史跡に指定され，その保存・活用が図られている。



1. 西白島地点（槽跡）
2. 城北駅北（旧西白島）交差点地点（外堀跡）
3. 城北駅北（旧西白島）交差点地点（槽跡）
4. 基町高校前交差点地点（中堀跡）
5. 基町高校グラウンド地点（武家屋敷跡）
6. 本丸
7. 二の丸
8. 中央庭球場地点（中堀跡）
9. 太田川護岸地点（槽跡）
10. 広島県庁前地点（武家屋敷跡）
11. 紙屋町・大手町地点（外堀跡）

第1図 広島城遺跡西白島地点周辺遺跡分布図（S = 1 : 10,000）

次に、本遺跡の該当地点について、現在確認できる絵図面や地図等の資料を基にその変遷を具体的に追ってみたい。広島城域内における本遺跡の位置については、過去の広島城関連遺跡の発掘調査成果との関係から、調査前の段階である程度の想定が可能であった。すなわち本遺跡は、本丸から内堀を隔てて北側に広がっていた“北の郭”¹⁾の西側縁の一画で、郭の外周を巡る“搦手の外堀”²⁾とそれに面して設けられていた櫓等の一部にあたるものと考えられた。そこでまず、毛利氏時代の様相を描いたものとされる『芸州広島城町割之図』（広島市立中央図書館編1990）において該当箇所付近を見ると、“北の郭”自体が存在せず、また“搦手の外堀”は太田川と京橋川をつなぐ自然流路となっている。『知新集』に収められている『毛利氏時代城郭内の図』（広島市立中央図書館編1990）でも自然の川のままであり、また城郭側の川岸は「ツ、ミ（堤）竹藪」となっていて川沿いに櫓等の施設が設けられていた様子はない。毛利氏時代の当該地周辺は、武家屋敷の区割りがなされていたとはいえ、川筋以外の防備施設を持っておらず、本丸に隣接した城郭の重要な区画としてはまだまだ未整備の状態であったものと思われる。続く福島氏の時代には、前述したように城郭の大規模な改修が行われたとされるが、具体的な工事箇所や内容については明らかではない。次に、浅野氏入封後あまり時期を経ていない段階の状況と考えられる『寛永年間広島城下図』（広島市立中央図書館編1990）では、“北の郭”及び“搦手の外堀”が既に構築されており、堀際の櫓や塀等も完備して城郭としての構えが十分に整っている。本遺跡は“北の郭”の北西隅櫓のすぐ南西側に建つ櫓一帯にあたり、櫓の東側すなわち郭内側は武家屋敷地として整然と区画されている。また“搦手の外堀”の西側部分は概ね北東－南西方向に延びているが、単調な直線堀ではなくこの櫓付近でわずかに屈曲した「く」の字状の形態を成している。さらに少し時代の下った正保3（1646）年に広島藩から江戸幕府へ提出された『安芸国広島城所（絵図）』（広島市立中央図書館編1990・巻頭図版1）は、事前に幕府が定めた基準に則って作成されたもので、建物や石垣等の様子が入念に描写されているとともに、各所の寸法が記載されている等、正確な情報が盛り込まれた優れた絵図である。この絵図によると、本遺跡に該当する櫓は一重のいわゆる平櫓で、その南北両側には塀が取り付けられており、北側の塀は本櫓の北東側に建つ“北の郭”北西隅櫓へとつながっている。ちなみに北西隅櫓は、二重櫓の2方向に付櫓が付随した形態で、広大な“北の郭”の隅を固めるのにふさわしい重厚な構えである。また本櫓の西側の“搦手の外堀”部分には「広十間深九尺」の書き込みがある。この計測値が堀のどの位置のものであるかは示されていないが、外堀のおおよその規模を窺い知ることができる。これ以降、江戸時代を通じて数種類の絵図が確認されているが、当該地周辺の状況はいずれもこの『安芸国広島城所（絵図）』と大差は見られない。

なお、広島城は太田川の氾濫による洪水の被害にたびたび見舞われており、城郭や城下に損害を与えたものだけでも浅野氏の時代に66回も記録されているという（土井1989）。例えば承応2（1653）年の大洪水による城郭への損害状況を見ると、流れの上流側にあたる城郭北方の被害が甚大で、特に本遺跡該当地点を含めた“搦手の外堀”西半側一帯により顕著である（多森1993）。従ってこの辺りの櫓・塀・門等の建物や石垣・土塁等の構造物は洪水のたびに修復が頻繁に繰り返されたものと考えられ、場所によっては全く新たな材料を使って新補された箇所も存在するであろう。上記のように絵図上では平面的な変化はないようであるが、実際の構築物は時代とともにかなりの変遷を

遂げている可能性のあることは念頭に置いておく必要がある。

明治時代に入り、同5・6（1872・73）年には城郭内の門・櫓群が取り壊されたとされ（広島市教育委員会編1989）、当該箇所櫓や塀等もこの頃撤去されたものと考えられる。明治初期の広島城の姿を詳細に伝える資料としては、明治10（1877）年に陸軍によって作成された『広島城之図』（広島市教育委員会編1989・巻頭図版2）がある。これによると、当該箇所ははまだ江戸時代の様相を保っているように見受けられるが、実際には櫓台の石垣や塀の土台のみが残されている状況であった。また“搦手の外堀”に関しては、同44（1911）年頃には埋め立てられたようで（広島市教育委員会編1989）、太平洋戦争後もしばらくは地図上でその痕跡が確認されるが、それもやがては全く姿を消してしまった。

以上見てきたように、本遺跡は櫓や堀等といったいわば城郭そのものを構成する構造物が立地していた場所である。前述したように、本遺跡に隣接した数地点において既に広島城関連遺跡が発掘調査されており、部分的にはあるがかつての広島城の姿が明らかになっている。それらの成果を加味しつつ本遺跡の位置づけについて考察することにより、広島城の本来の姿やその変遷についてより具体的に解明する一助となるものと期待される。

注

- 1）本丸の北側に位置する郭については、1991・92年度に行われた広島城外堀跡西白島交差点地点の発掘調査報告書において便宜的につけられた“北の郭”の呼称を引き続き用いる。
- 2）“北の郭”の外周を巡る堀には、1991・92年度に行われた広島城外堀跡西白島交差点地点の発掘調査報告書において“搦手の外堀”の仮称がつけられた。一方広島城の北から西側にかけては、“搦手の外堀”の北西屈曲点から“四角堀”を経て太田川の流路そのものが外堀とみなされている。本遺跡内の堀部分は、“搦手の外堀”の北西屈曲点から南西方向へと枝分かれし、外堀と中堀をつないでいるいわば連結堀の一部といえる。従って厳密に言えば“搦手の外堀”と呼ぶべきではないが、本報告書では便宜上従来の“搦手の外堀”の呼称を踏襲することとする。

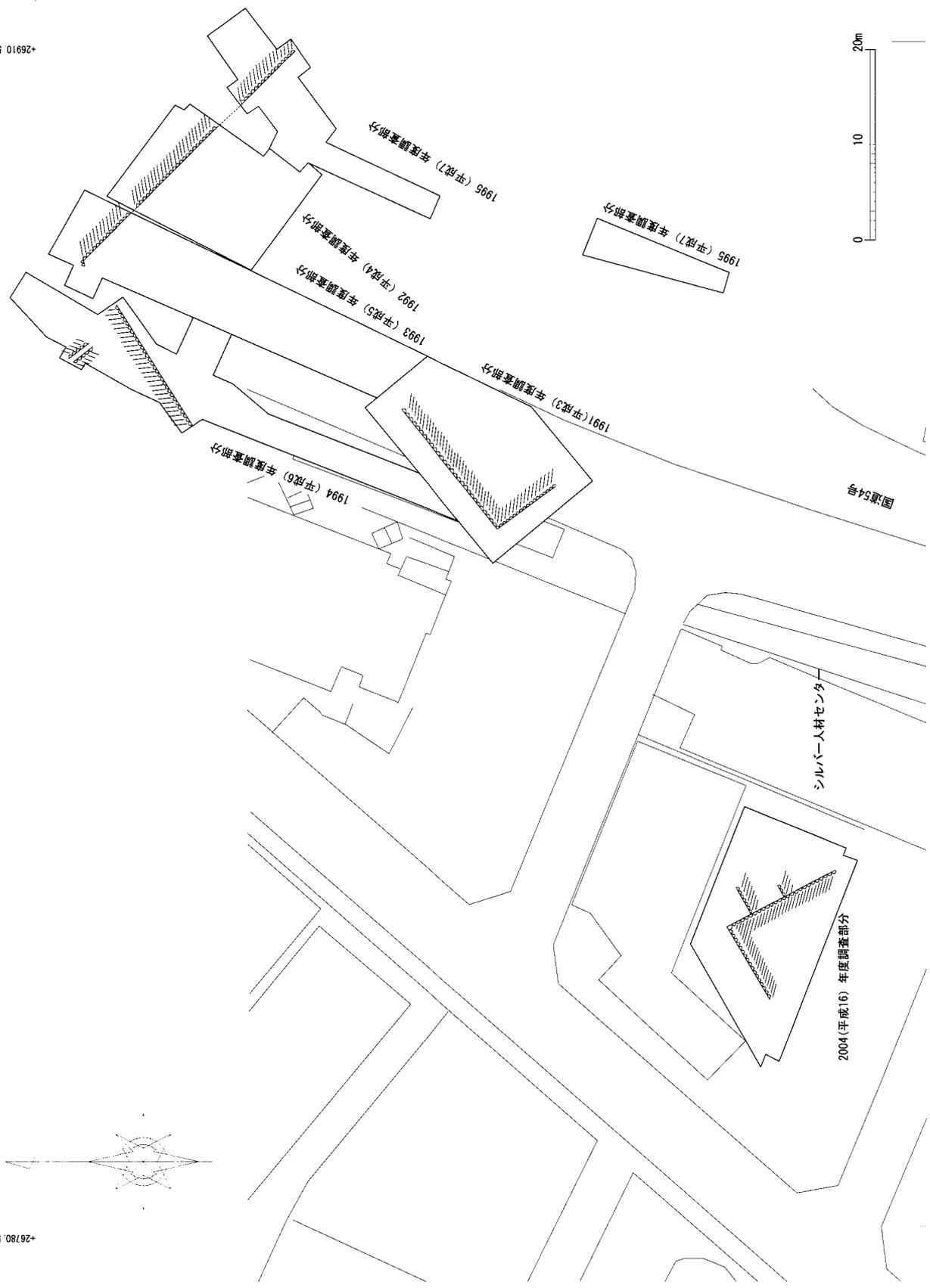
参考文献

- 秋山伸隆1989「広島城の四〇〇年 一 毛利時代の広島城」『図説広島市史』広島市
- 天野卓郎1989「広島城の四〇〇年 四 近代の広島城・五 戦後の広島城」『図説広島市史』広島市
- 大室謙二編1995『広島城関連遺跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団
- 桑田俊明1980『広島城外郭櫓跡発掘調査概報』広島県教育委員会
- 高下洋一1992『広島城外堀跡紙屋町交差点地点』財団法人広島市歴史科学教育事業団
- 篠原達也編1997『広島城外堀跡城北駅北交差点地点発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団
- 篠原達也編1999『広島城外堀跡紙屋町・大手町地点』財団法人広島市文化財団
- 太丸伸章編1995『歴史群像名城シリーズ⑨ 広島城』学習研究社
- 多森正晴編1992『広島城中堀跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団
- 多森正晴編1993『広島城外堀跡西白島交差点地点』財団法人広島市歴史科学教育事業団
- 土井作治1989「広島城の四〇〇年 二 近世初期の広島城・三 近世中・後期の広島城」『図説広島市史』広島市
- 広島市教育委員会編1989『史跡広島城跡資料集成』第一巻
- 広島市立中央図書館編1990『広島城下町絵図集成』
- 福原茂樹1994『広島城県庁前地点発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団
- 福原茂樹1999『広島城遺跡基町高校グラウンド地点』財団法人広島市文化財団

福原茂樹2001「織豊系城郭としての広島城－発掘調査の成果からみた築城期の広島城について－」『芸備地方史研究』第228号 芸備地方史研究会
福原茂樹編2004『史跡広島城跡本丸遺構保存状況調査報告』財団法人広島市文化財団
三浦正幸1999『城の鑑賞基礎知識』至文堂

+26910.5089

+26780.5075



-176819.8100

第2図 広島城遺跡西白島地点調査区位置図 (S = 1 : 600)

Ⅲ 遺構と遺物

1. 調査概要

本遺跡は、都心の緑地帯として市民に親しまれている広島城跡の北方わずか300mほどの所にある。現在城跡内には天守閣や城門・櫓等が復元され、かつての威容を偲ぶよすがとなっているが、一步離れた本遺跡周辺ではその名残をとどめるものは一見何もない。しかしながら、本遺跡のすぐ北東側にある城北駅北（旧西白島）交差点周辺では、平成3（1991）年度以降数次に渡って発掘調査が行われ、地下数mの所から広島城の堀跡や櫓台跡等が検出されている（多森編1993・大室編1995・篠原編1997）。この地域一帯の地下には、これ以外にも遺構が残されている可能性は十分に考えられた。そしてこのたび、本遺跡地点にマンションが建設されることになり、建築工事に先立って試掘調査が行われた。その結果、広島城に関連するものと思われる石組みが確認され、記録保存に向けた発掘調査が実施されることとなったのである。

発掘調査前の調査地点は駐車場として利用されており、地表面にはアスファルト舗装が施されていた。舗装面の標高は約3.4mである。調査に当たってはまず調査区全面のアスファルトをはがし、その後重機によって整地攪乱層を約1m掘削した。これ以降は手作業で進めることとし、まずは調査区内の中央を東西に横断する形で幅1mのトレンチを掘り、土層の堆積や遺構遺存状況等について概略を把握した。トレンチの西半部分で北東―南西方向に連なる石組みを確認したが、この石組みよりも西側は砂質土や粘質土層が多く、掘底にあたるものと推定された。一方石組みよりも東側は何らかの石垣の内部かもしくは“北の郭”内と想定された。つまり、本遺跡は堀部分とそれ以外の石垣もしくは地面の部分に大別され、さらにその地面が仮に“北の郭”内であるとすれば、そこに何らかの遺構が残存する可能性も考えられたのである。なお、トレンチの東西両端付近では既存の建物の建設に伴う攪乱層が見られ、その影響は調査区全体に及んでいるものと思われた。

次に調査区を「田」の字形に4つに区分けし、北東（NE）・南東（SE）・南西（SW）及び北西（NW）区とした。まず北東及び北西区を掘り下げたところ、トレンチ西半側で検出した石組みは北東方向へ直線的に続くのではなく、ほぼ直角に折れて南東方向へ伸びることが判明した。この時点で、この石組みは櫓台石垣の一部であり、しかもその隅の部分が検出されたものと判断した。さらに調査を進めるに従って、この櫓台に付設された石積み等も検出され、最終的には櫓台1箇所・土塁1箇所・用途不明石列1箇所及び堀が確認されるに至った。

櫓台部分については、石垣上端面を確認した後、立面の形状を追いながら石垣裾の接地部まで掘り下げた。裾付近では根固め用の捨石とも思われる石材群を検出した後、それらを除去し石垣根石の設置状況の確認に努めた。櫓台内部に充填されている裏込め石は、上面を検出するにとどめた。また櫓台北東面石垣に付設されていた土塁及び用途不明石列についても、立面形状を追いながら接地部まで掘り下げた。なおこれらの付設石積みによって櫓台北東面石垣が部分的に隠された状態であったため、石積みの精査後にそれらを一部撤去し櫓台石垣の全面を確認した。堀部分については、石垣裾から約1mまでの範囲は石垣設置状況の確認のため堀底まで掘り下げたが、それよりも離れた部分については湧き水の影響もあり掘り下げは断念した。

遺物の大半は堀部分からの出土であったが、櫓台の裏込め石や土塁上面からもわずかながら検出された。種類としては陶磁器類・瓦類及び土器類等であった。

2. 遺 構

(1) 櫓 台 (第3・4図, 図版1～4・7)

① 規模と形状

本遺構は、北東及び北西に面を向けほぼ直角に屈曲する石垣と、その内部に充填された裏込め石とで構成されている。平面が四角形を成す櫓台の北西隅を含む一画が検出されたものであるが、廃絶の過程で上部が削平されており基礎付近のみが残存していた。石垣上端・裏込め石ともに上面は平坦ではなく、場所により標高も約1.0～2.5mの間でまちまちであるが、大まかには南東側が高く北西側が低くなっている。石垣上端石列の軸方向は北東側が概ねN153° E, 北西側が同じくN61° Eであるが、ともに完全な直線ではない。櫓台隅の部分が出っ張り、石垣各面の中央へ向かうにつれて次第に内側へ入り込んでおり、平面的に見ると弓形に緩く弧を描いている。現状での石垣上端石列の長さは北東側で約13.1m, 北西側で約9.8mで、接地部からの高さは北東側で最高約1.9m, 北西側で同じく約1.5mである。ちなみに、本遺跡から北東側の城北駅北(旧西白島)交差点付近に存在していた櫓台の高さは約4.5m前後(多森編1993), また城郭南面の中堀に面して設けられていた櫓台の高さは約4.8m程度(多森編1992)とそれぞれ推測されていることから、本遺構も本来はこれらの数値に近い規模であったものと考えられる。なお北東面・北西面石垣ともに調査区外にまで続いていることは確実で、櫓台全体としての遺存規模は不明である。

② 構 造

• 石積みの方 法

石垣全体の築造方法を見てみると、まず石材の加工度合いから言えば、石材どうしの接合部をある程度打ち欠いて接合面を増やした“打込み接ぎ”にあたる。また石材の積み上げ方では、石材を1段ずつ並べて据え横目地が通っている“布積み”と、石材を不規則な形状で積み上げ横目地の通らない“乱積み”との中間的な様相を示している。櫓台の隅部分については、石垣築造上の最重要箇所であるため本来ならば“算木積み”等の整った石組みが見られるはずであるが、本遺構では明確な根石が見られず、また砂層の上に大型石材が直接載っている等、非常に乱雑で不安定な状況を示している。

現状での石垣の勾配は、北東面は直線的であり、最も残りの良い南東端付近で約80°の角度で立ち上がっている。北西面は2段分の石積みしか残存しておらず、勾配角度を算出するには至らなかった。

石垣に用いられている石材は大半が自然石で、矢穴痕が残る加工石は部分的に見られる程度である。また石材どうしが完全に密着して積み上げられている箇所はほとんどなく、石材の隙間には“間石”と呼ばれる小石が詰め込まれて塞がれている。この“間石”の施工状況には場所によって違いが見

られ、北東面石垣のうち隅部から約3.2m付近よりも南東側では極めて精緻であるが、隅に近い部分と北西面石垣では“間石”が少なく、石材間の隙間が際立っている。さらにこの境界によって、使われている石材の大きさにも相違が見られる。すなわち、北東面石垣の境界以南の石材は概ね70cm角程度であるが、北東面石垣の隅付近と北西面石垣では90cm角程度と比較的大型になり、中には1m角近い石材も見られるのである。こうした相違の境界となっている北東面石垣の隅部から約3.2m付近というのは、後述するように本遺構から北東方向へ延びる土塁が取り付いている位置にあたる。つまりこの位置よりも西側の石垣は“搦手の外堀”に直接面した部分であり、長年に渡って水圧や波浪等による影響を受け続けた箇所である。このことが原因で“間石”の多くが欠落したものと考えられ、また頻繁に起こった洪水に耐えられる強度を確保する目的から、この場所の石垣には他所と比べて大型の石材が用いられていたものと推測されるのである。ちなみに、前述したとおり不規則で乱雑な状況で検出された櫓台隅部分については、半ば崩壊したままかあるいは簡易的に修復された状態である可能性が考えられるが、その要因の一つに、堀端に立地しており堀の水の影響を受け続けたことがあったと考えても不自然ではない。

- 捨石状遺構

北東面・北西面石垣の接地部から幅1m内外の範囲内では、堀底に拳大から人頭大の割り石が散見された。石材は石垣の裾に近いほど比較的密になっており、捨石状の遺構とも考えられる。しかしながら、広島城外郭櫓跡の調査（桑田1980）によって確認された捨石遺構のように、幾重にも深く積み重ねられかつ上面がほぼ平坦となるように丁寧に敷き詰められた状態ではなく、いわば石材を上から無造作に落とし込んだように不揃いな状況であった。さらに、場所によって疎密の違いがあり、また上下の積み重なりがあまりないこと等からすると、本遺構は櫓台上部からの自然落石が石垣の裾にとどまったものとも考えられる。

- 根石（基礎石）

上記のような捨石状遺構を除去し、石垣の基礎部分の状況を確認した。北東面石垣では、接地部の根石は石材の平坦面を下にしてほぼ等間隔に据えられており、石材どうしの隙間には“間石”が施されている。また接地部の標高は石垣の南東端で約0.5m、同じく北西端付近では乱雑になってはいるものの約0.2mで、東側から西側へ、つまり“北の郭”側から“搦手の外堀”へ向けて僅かずつ低くなっている。一方北西面石垣では、前述したように北東面と比べて根石の規模が大きく、また“間石”は少ない。各石材は平坦面を下にして据えられており、接地部の標高は約0.1mでほぼ水平である。

根石の据え方で特徴的なのが、北東面石垣の南東半で顕著に見られる張り出しである。すなわち、根石もしくはその周囲の積み石の一部が石垣面から50cmほど堀側へ張り出して据えられているもので、同様の工法は城北駅北（旧西白島）交差点の櫓台西面（多森編1993）や城郭大手側の外堀の櫓台南面（篠原1999）等においても検出されている。このような工法をとることによって、根石部分に集中してかかる石垣の荷重を分散させ、砂地上に築かれた石垣が基礎部分から滑り崩壊することを防いでいるものと思われる。なお、一般に軟弱な地盤上に石垣を築く際には、根石が個別に沈下する不同沈下を防ぐ目的で、根石の下に“胴木”と呼ばれる木材基礎が組まれることがある。実際

に広島城跡でも検出された事例がある（財団法人広島市文化振興事業団編1990）が、本遺構においては確認されなかった。今述べた根石等の張り出しが、あるいはこうした“胴木”の役割を果たしていたとも考えられるのではないだろうか。一方こうした根石の張り出しは、北東面石垣の南東半でのみ見られ、北西面石垣では全く行われていない。張り出しが上記のような役割を持つのであれば、櫓台全周に施されていても不思議ではない。こうした偏在の原因は、本遺構で繰り返されたであろう修復工事の時代的な工法の違いによるものとも考えられるが、確証はない。

• 内部構造

本遺構の調査では、断ち割りによる内部確認にまでは至らなかった。従って櫓台内部の状況については、検出面における石垣上端石列及び裏込め石の観察のみにとどまった。

石垣上端の石材を見ると、幅と奥行き（控え）の長さがほぼ同じものが多く使われている。奥行きは約80～100cm程度で、過去の発掘調査事例と比較しても標準的なものといえる。また裏込め石に関しては、前述したとおり検出面の標高が約1.0～2.5mの間でまちまちで、櫓台削平時に平坦に均すことなく埋め戻されたことを示している。使われている石材は拳大から人頭大の割り石で、櫓台内に隙間なく詰め込まれていた。なお標高の高い位置には、人頭大以上で一般的な裏込め石としては大型の石材が集まっており、これらは削平時に石垣石等が何らかの目的でここに集められたものと思われる。さらに過去の調査事例では、櫓台内部の中心付近には、粘質土や砂質土等から成る土台基礎が築かれているものが多い（桑田1980・多森編1992・多森編1993・篠原編1999）が、本遺構においては表面観察の限りでは明確にできなかった。

③ 墨書石

本遺構の北東面石垣の中央付近と北西面石垣の南西端付近で、各1石ずつ墨書石を確認した（第4図中a・b）。墨書石aは石垣面から張り出した積み石で、人名と思われる「いつミ」と頭文字の記号「㊦」及び判読不明文字が記されている。石材に残る矢穴痕の位置から、この墨書は石材を割り取った後、その分割面に施されていることが分かる。またbは根石で、記号「㊦」が付されている。いずれもその意味や役割を明らかにすることはできなかった。なお、本遺構では刻印は確認されていない。

(2) 土 壘（第3・4図，図版5・8）

本遺構は、数段の基礎石垣の上に積み石を施した堤状の構造物である。遺構の端部は櫓台の北東面石垣に接しており、そこから北東方向へと延びているもので、調査区外へも続いているものと思われる。櫓台北東面石垣へは、隅部から南東方向へ約2.9～4.3mの位置で取り付いている。もっとも、基礎石垣と積み石による構造は本遺構の北西側にのみ見られるもので、南東側は上部に積み石があるもののその下は全て粘質土及び砂質土の交互堆積層となっている。さらに、本遺構の一部を撤去した際に断面を観察したところ、基礎石垣は北西側に数列分が設けられているだけであり、また積み石は北西側ほど厚く南東側へいくに従って薄くなって粘質・砂質土堆積層の厚みが増している状況であった。

北西側の基礎石垣上端石列の軸方向はN59°Eで、櫓台北東面石垣の軸方向と概ね直交している。

現状での基礎石垣上端石列の長さは約3.0m、その上の積み石は最長で約3.7mで、奥行きは約2.2mである。接地部から基礎石垣上端までの高さは最高約1.0m、積み石の最高部までが最高約2.0mである。接地部の標高は約0.08mでほぼ水平である。

基礎石垣に用いられている石材は50～60cm角程度の割り石で、その大半が自然石であり、矢穴痕の残る加工石がわずかに見られる。石材の積み方に規則性は見られず、“間石”は少ない。また積み石には人頭大の割り石が用いられ、わずかに川原石が混じる。基礎石垣の勾配は約56°、積み石の勾配は40°程度で、傾斜に変化が付いている。

なお、基礎石垣の南西端付近で墨書石を確認した（第4図中c）。閉じた扇子の形を表していると思われる記号「卍」及び判読不明文字が記されている。石材に残る矢穴痕の位置から、この墨書石は石材を割り取った後、その分割面に施されていることが分かる。さらには、この墨書石の下になっていた石材の側面にも、やや大型の記号「卍」が確認された。この記号が何を意味するのかは明らかではないが、隣接した2石に同一記号が見られたことから、石垣普請工事における石材配置作業等に供されたものと考えられる。なお、本遺構では刻印は確認されなかった。

(3) 用途不明石列（第3・4図、図版6）

本遺構は、石垣基礎状の石材がわずかに1段、しかも2石のみ並んで検出されたものである。遺構の端部は櫓台の北東面石垣に接しており、そこから北東方向へと向かっている。櫓台へは、隅部から南東方向へ約7.1～7.4mの位置で取り付いている。石材は北西側に面を向けて設けられており、また石材の周囲には角礫が数個付いているものの、裏の南東側には裏込め石状のものはほとんど見られない。また、本遺構の下は粘質土及び砂質土の交互堆積層となっている。

石列の軸方向はN58°Eで、櫓台北東面石垣の軸方向と概ね直交しているとともに、前述した土塁とはほぼ平行の位置関係にある。現状での石列の長さは約1.8m、奥行きは約0.6mで、接地部から石列上端までの高さは最高約0.7mである。接地部の標高は約1.4mで、櫓台及び土塁の接地部と比較するとかなり高い。石列に用いられている石材は60cm角程度の割り石で、矢穴痕が残る加工石である。2石とも四角形に丁寧に整形され、しかも横の目地が通った“布積み”の技法がとられている。接地部の標高が異例に高い点も含めて、本遺構は本遺跡内の他の石積みとは明らかに様相が異なっているが、その要因が築造時期の違いによるのか、あるいは用途の違いによるのかは明らかでない。

(4) 堀（第3図）

調査区内で櫓台及び土塁よりも西側の部分は、“搦手の外堀”にあたっている。本遺構には砂質土や粘質土層が堆積していたが、激しい湧き水のため堆積層序を確認しながらの掘り下げは不可能な状態であり、堀底の状況や形態等の確認には至らなかった。

3. 遺物

本遺跡における遺物はその大半が堀部分からの出土であるが、前述したとおり湧き水の影響で遺物の出土層序や出土状況を押さえながらの掘り下げができず、なかば拾い上げの状態にとどまった。また櫓台の裏込め石や土塁の上面からも、極めて少量ではあるが遺物が検出された。種類としては陶磁器類及び瓦類が主で、わずかに土器類等が認められた。多くが破片の状態であり、形を明確にできたものは少ない。主な遺物の詳細は遺物観察表に委ねることとし、ここではその概略を見ていきたい。なお本報告書では、主要遺物を図化するとどめた。

(1) 陶磁器・土器 (第5図, 図版9)

陶磁器類は、主に肥前系の陶器や染付が中心で、関西系のものが若干含まれる。器種としては碗・蓋付碗の蓋・皿・鉢・猪口等といった日常的に使われた雑器類がほとんどである。生産年代がある程度押さえられる遺物をまとめてみると、図化できた陶磁器は古いもので17世紀の前半頃、新しいものでは19世紀初め頃まで時代が下る。その他の細片も含めて、本遺跡から出土した陶磁器類はほぼこの年代内に納まるものと考えられる。また土器は、土師質の焙烙と瓦質と思われる破片を図化した。これらの年代は不明である。

なお、堀底から検出された陶磁器類には、明らかに明治以降のものと言えるものはほとんど存在しなかった。このことは、“搦手の外堀”の少なくとも本遺跡部分が、城郭廃絶後からそう時間を置かない時期にほぼ埋まった状態であったか、あるいはこの周辺が日用雑器類が頻繁に投棄されるような状況にはなかったことを示唆しているものといえる。

(2) 瓦 (第6～8図, 図版10～12)

瓦類には、軒平瓦・軒丸瓦・丸瓦・鬼瓦及び鯨瓦がある。出土数は軒平瓦・軒丸瓦が多く、丸瓦・鬼瓦及び鯨瓦はわずかな量にすぎない。軒平瓦は瓦当に唐草文を施したものが多いが、中には中央に桐を据えたものもある。軒丸瓦は全て巴文で、銘や符号の付けられたものも見られる。

参考文献

- 江崎一博1988『広島市の文化財第42集 史跡広島城跡二の丸第一次発掘調査報告』広島市教育委員会
- 大橋康二1989『考古学ライブラリー55 肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
- 大室謙二編1995『広島城関連遺跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団
- 岡田秀明1989『広島市の文化財第44集 史跡広島城跡二の丸第二次発掘調査報告』広島市教育委員会
- 桑田俊明1980『広島城外郭櫓跡発掘調査概報』広島県教育委員会
- 篠原達也編1997『広島城外堀跡城北駅北交差点地点発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団
- 篠原達也編1999『広島城外堀跡紙屋町・大手町地点』財団法人広島市文化財団
- 財団法人広島市文化振興事業団編1990『石に秘められた島普請——広島城の石垣展図録』
- 多森正晴編1992『広島城中堀跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団
- 多森正晴編1993『広島城外堀跡西白鳥交差点地点』財団法人広島市歴史科学教育事業団
- 福原茂樹編2004『史跡広島城跡本丸遺構保存状況調査報告』財団法人広島市文化財団
- 三浦正幸1999『城の鑑賞基礎知識』至文堂

第1表 陶磁器・土器観察表

(単位：cm)

No	出土位置	寸法			器種	陶磁	特徴・文様	備考
		口径	器高	底径				
1	NW区	12.6			碗	陶器	内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや膨れる。胎土は灰色。	肥前・17c前半
2	SW区	20.8			碗	青磁	やや湾曲しながら立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味に終わる。胎土は灰白色。	
3	SW・NW区堀	12.1			碗	陶器	やや直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。胎土は灰白色。	肥前・17c前半
4	SW・NW区堀	12.7			皿	陶器	口縁部内面は屈曲。外面は底部以下無釉。黄褐色の胎土に灰色の釉薬がかかる。	肥前・17c前半
5	NW区	6.8	5.5	4.2	猪口	染付	口縁端部は口紅。外面は雨降り文。胎土は白色。	肥前・1700年前後
6	NW区堀	15.3	14.0	11.1	蓋付鉢	染付	口縁は無釉。外面は雲竜文で、底部外面に鋸歯文。高台外面に一条の圏線。	肥前
7	SW・NW区堀	10.6	6.0	6.0	蓋付鉢	染付	口縁は無釉。外面は上部と下端部の圏線の間に草花文。高台外面に二条の圏線。	肥前
8	SE区			2.0	蓋付碗蓋	染付	高台外面に二条の圏線。	肥前・18c後半
9	NW区	9.0	2.9	3.6	蓋付碗蓋	染付	外面は青磁。内面は四方禪文。見込は二条の圏線の中に五弁花。	肥前・18c後半
10	SE・NW区堀			4.3	蓋付碗	染付	底部外面に一条、高台に二条の圏線。	肥前・18c後半
11	NW区堀	7.9	6.0	3.7	筒形碗	染付	外面は人物文、底部は龍文。高台に二条の圏線。内面は口縁部に二条の圏線。見込は二条の圏線の中に山水文。	肥前・18c末～19c初
12	NW区	8.6	5.4	2.5	碗	染付	外面は雲龍文。内面は口縁部に二条の圏線。見込は一条の圏線。	肥前・18c末～19c初
13	SW区堀			7.6	皿	染付	見込に水鳥文。底部に太明銘。	肥前・17c後半
14	SE・NW区堀	12.6	3.9	8.1	皿	染付	外面は唐草文、底部に一条の圏線。内面は梅文。見込は二条の圏線の中にコンニャク印判による五弁花。	肥前・18c後半
15	SW区				変形皿	染付	口縁端部は口紅。外面に文あり(不明)。内面は禪文と草花文(?)。見込に文あり(不明)。	肥前・17c代
16	SW区	20.6	5.5	12.0	皿	陶器	高台は無釉。内面は竹林文。	関西系
17	NW区			8.5	皿	陶器	胎土は明黄灰色で、その上に灰白色の釉薬。高台は無釉。見込に五箇所の目積み痕跡あり。底部に「ヨカ」の墨書あり。	墨書
18	NW区				焙烙	土師質	口縁部は強く外反。外面は煤が付着。胎土は黒褐色。	
19	SW区堀				?(底部)	瓦質(?)	灰黄色を呈し、胎土は精緻。焼成は良好。外面に墨書あり(解読不能)。	墨書

第2表 軒平瓦観察表

(単位：cm)

No	出土位置	種類	瓦 当										平瓦厚	備考
			上弧幅	下弧幅	文様区		周縁幅				周縁高	顎部厚		
					左右幅	上下幅	上部	下部	脇区左	脇区右				
20	SW・NW区堀	軒平瓦				3.2	1.6	0.7		5.3	0.5	2.7	2.1	
21	NW区	軒平瓦				2.4	1.7	0.9			0.4	1.7	2.0	
22	SW・NW区堀	軒平瓦						1.0			0.5	2.0	1.9	
23	NW区	軒平瓦				2.8	1.5	0.7	6.0		0.7	1.8	1.7	
24	SW区堀	軒平瓦				3.1	1.8	0.9		1.5	0.9	2.0		
25	NW区	軒平瓦				2.2	1.4	1.1	6.0		0.4	1.6	2.2	
26	NW区	軒平瓦				3.2	1.1	1.2	4.3		0.8	2.6		
27	NW区	軒平瓦				2.9	1.0	0.8		4.7	0.6	2.3	2.3	

第3表 軒丸瓦・丸瓦観察表

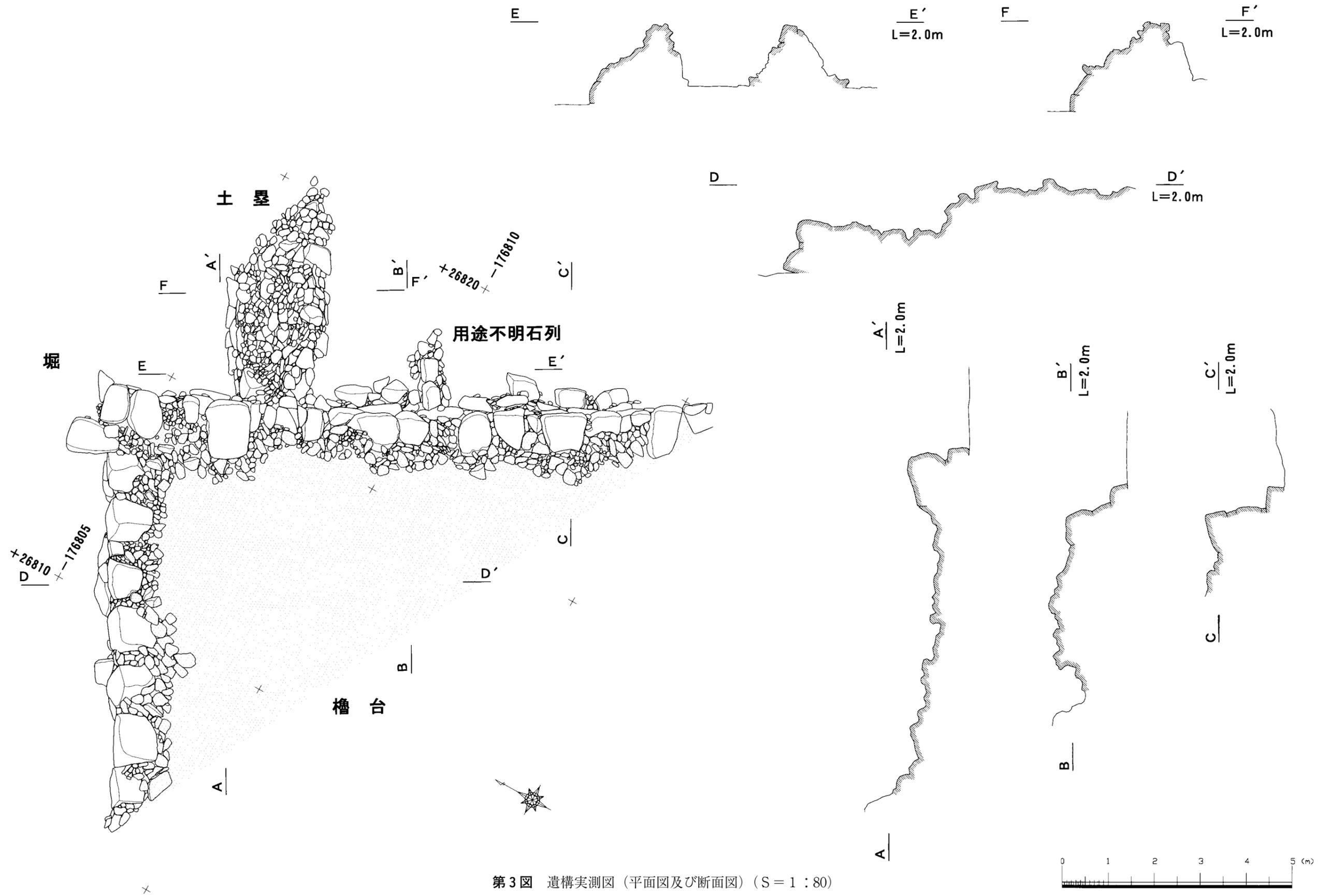
(単位：珠文数以外はcm)

No	出土位置	種類	瓦 当											全長	丸瓦厚	備考
			直径	文様区径	内区		外区内縁			外区外縁		瓦当厚				
					径	巴卷	幅	珠文			幅		高さ			
								数	径	高さ						
28	SE・NW区堀	軒丸瓦	14.5	9.0	5.00	右	2.00	6+ α	1.20	0.55	2.60	0.80	0.90			
29	NW区堀	軒丸瓦			7.30	左	1.70	14	1.20	0.40	2.50	0.55	1.40			瓦当面に窠による傷あり
30	調査区内	軒丸瓦	15.7	10.2	7.30	左	1.90	9+ α	1.10	0.25	2.90	0.45	1.60			范に傷あり
31	SW・NW区堀	軒丸瓦			6.50	左	1.90	5+ α	1.50	0.25	3.10	0.50	2.40		2.1	瓦当文様区一部なでる
32	SW・NW区堀	軒丸瓦	15.0	10.6	6.10	左	1.80	7+ α	1.30	0.30	2.05	0.30	1.45		1.5	
33	SW・NW区堀	軒丸瓦	16.1	10.5	5.70	左	2.40	8+ α	1.50	0.25	2.60	0.45	2.00			
34	NW区堀	軒丸瓦		8.5		左	1.60	7+ α	1.30	0.25	3.10	0.30	1.85			范に傷あり
35	SW・NW区堀	軒丸瓦	15.5	9.4	6.80	左	1.50	7+ α	1.30	0.30	3.10	0.50	1.90		2.1	
36	土塁裏込め内	軒丸瓦				左	1.40	5+ α	1.00	0.25	3.10	0.80	1.30			
37	NW区	軒丸瓦			6.00	左	1.30	11+ α	0.80	0.30	2.30	0.40	1.30			
38	調査区内	軒丸瓦				左	1.50	6+ α	1.10	0.40	2.50	0.30	1.30			
39	SE・NW区堀	軒丸瓦				左	2.30	5+ α	1.20	0.20	2.50	0.60	2.00			
40	SW区堀	軒丸瓦	15.3	9.7	6.70	左	0.80	11	1.40	0.20	3.50	0.40	1.90		2.2	玉縁に◎印あり
41	SE・NW区堀	軒丸瓦	16.5	11.4	7.70	左	2.00	14	1.00	0.50	2.70	0.60	1.90	34.0	2.5	目釘孔に目釘残存
42	SW・NW区堀	軒丸瓦	15.5	8.6	5.70	左	1.30	16	1.00	0.20	4.10	0.40	1.70		1.8	外縁に切離痕跡あり
43	SW区堀	軒丸瓦	15.8	9.7	6.90	左	1.20	11	1.10	0.25	4.00	0.35	2.05		2.2	瓦当文様区一部なでる
44	SW・NW区堀	軒丸瓦	14.5	9.6	4.60	右	2.20	16	1.10	0.30	2.90	0.70	1.40			外縁に「勘松」銘あり
45	SW区堀	丸瓦												33.8	2.2	玉縁に◎印あり

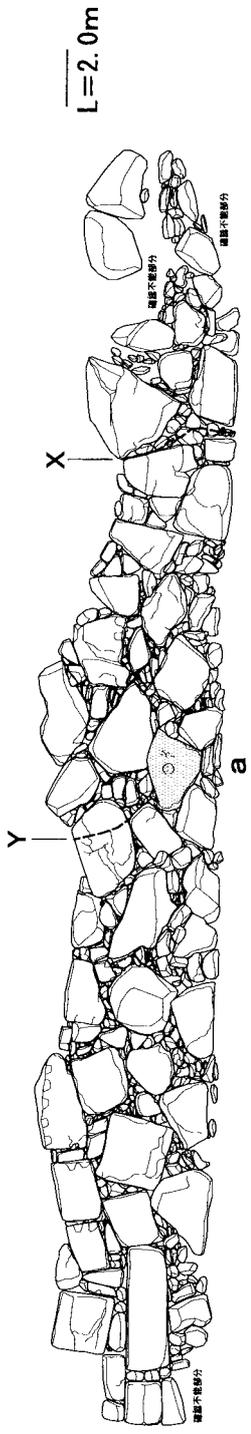
第4表 鬼瓦・鯨瓦観察表

(単位：cm)

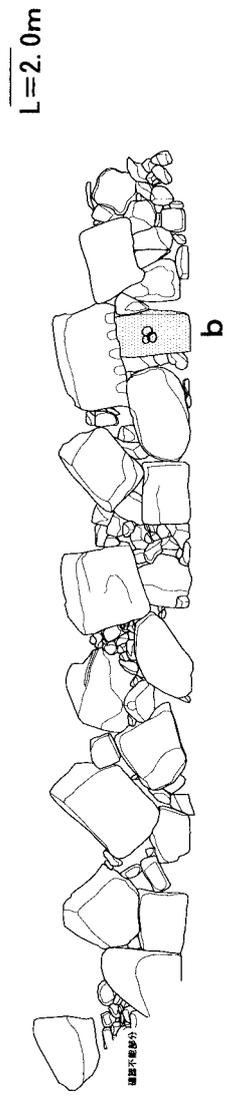
No	出土位置	種類	長 辺	短 辺	厚 さ	備 考
46	SE・NW区堀	鬼瓦	46.5	27.2	2.8	
47	SW区堀	鯨瓦				×の窠記号あり



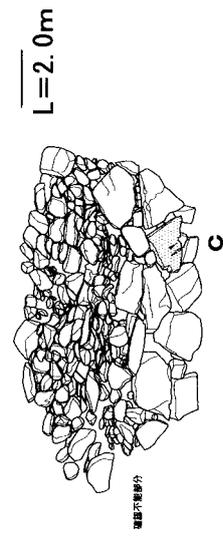
第3図 遺構実測図（平面図及び断面図）（S = 1 : 80）
 平面図の網目は裏込め石範囲，断面図の斜線は石材部分を示す



壇台 (北東面)



壇台 (北西面)



土塁 (北西面)



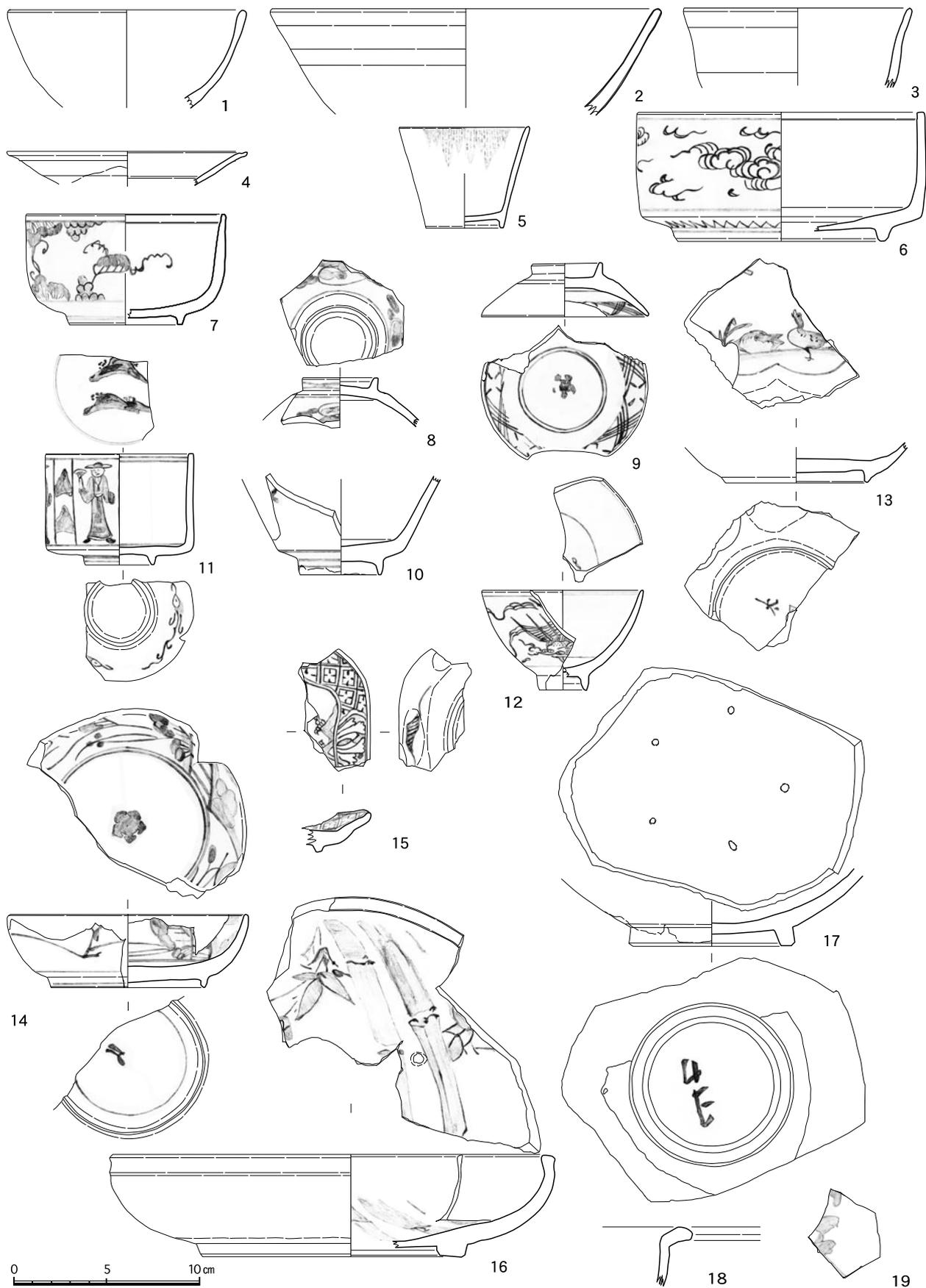
用途不明石列 (北西面)



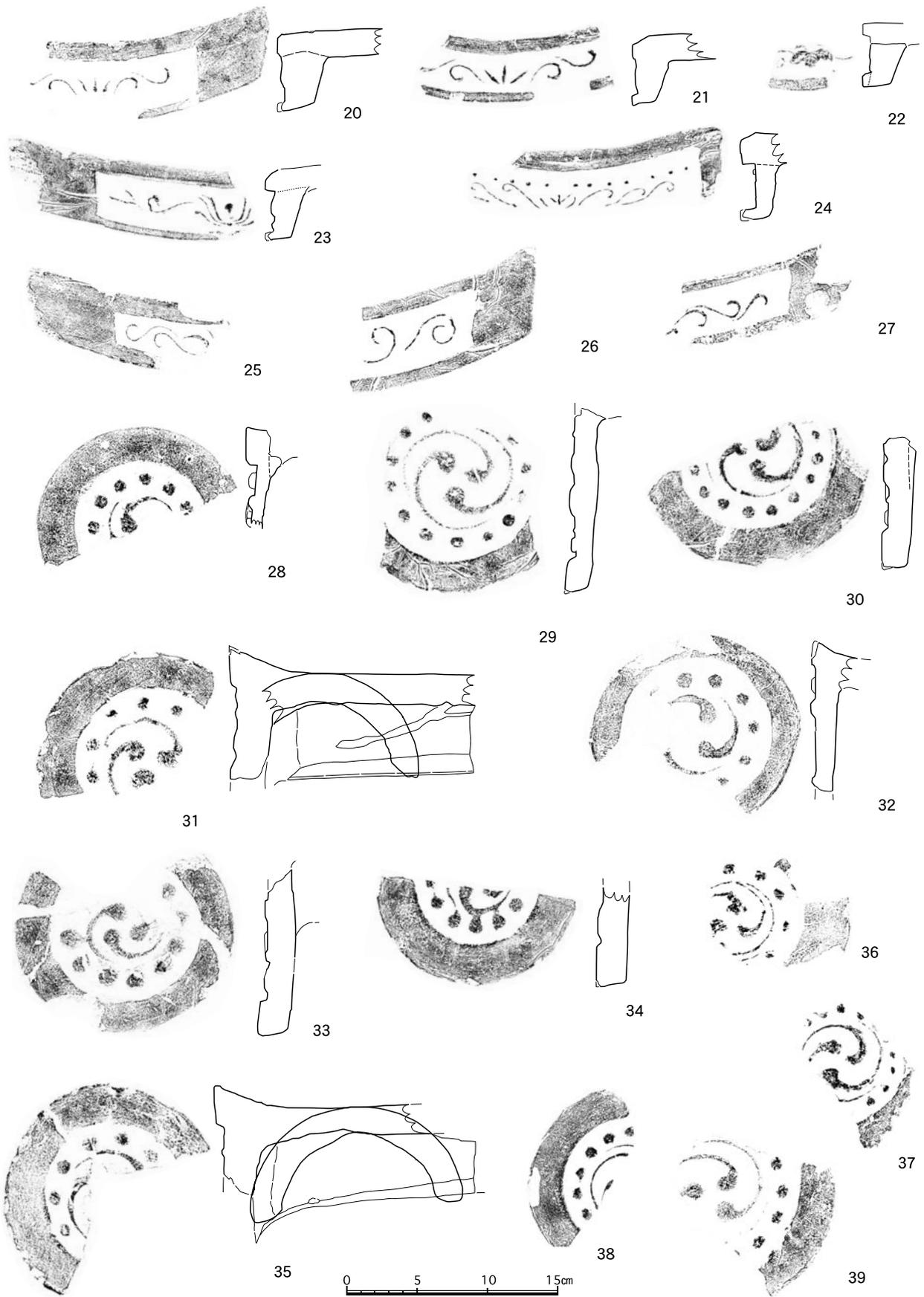
第4図 遺構実測図 (立面図) (S = 1 : 80)

a ~ c の網目は墨書石を示す

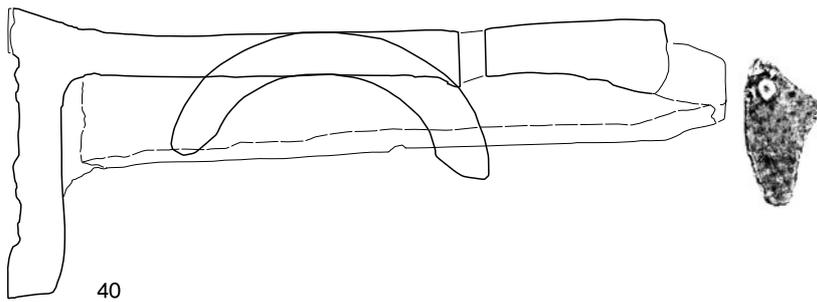
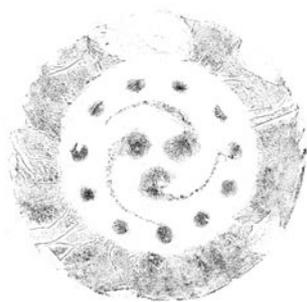
X の点線は土塁, Y の点線は用途不明石列の取り付き位置 (ともに北西面側) を示す



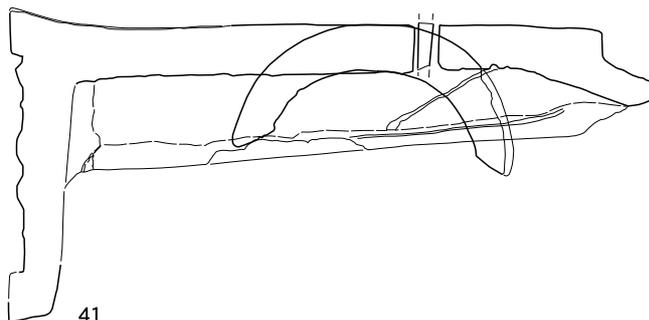
第5図 広島城遺跡西白島地点出土遺物実測図(1) (S=1:3)



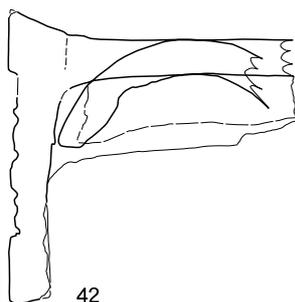
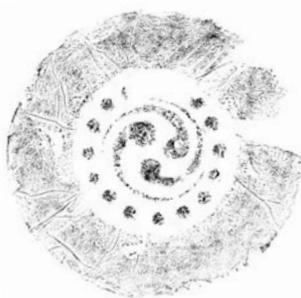
第6図 広島城遺跡西白島地点出土遺物実測図(2) (S=1:4)



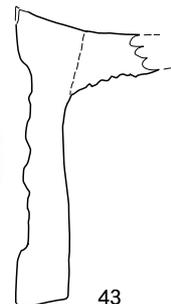
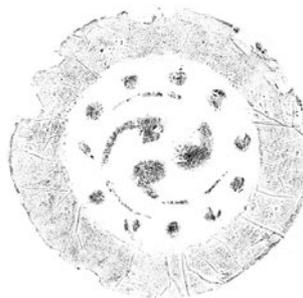
40



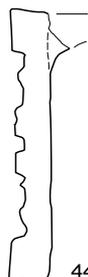
41



42



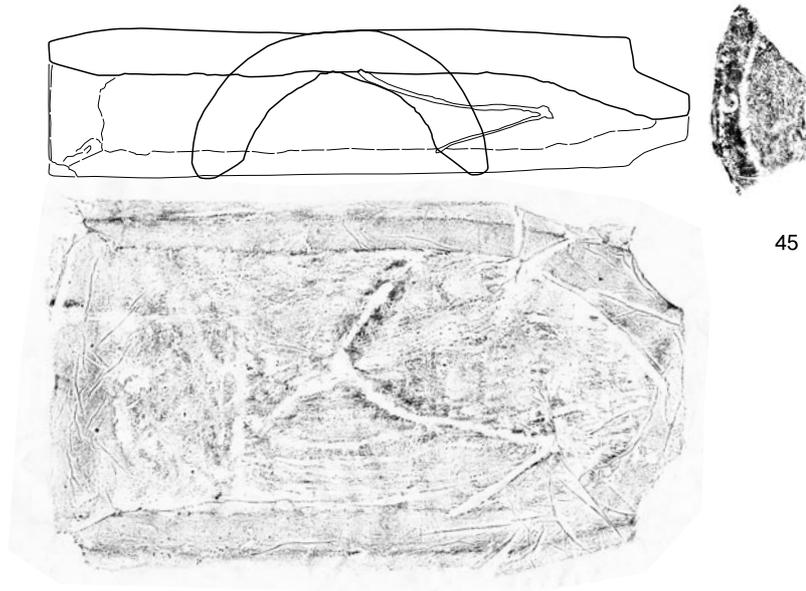
43



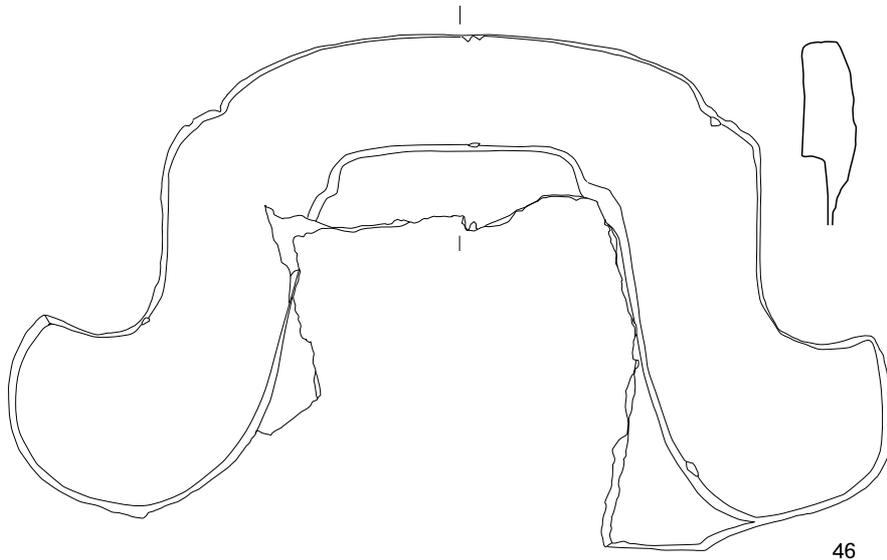
44

0 5 10 15cm

第7図 広島城遺跡西白島地点出土遺物実測図(3)(S=1:4)



45



46



第8図 広島城遺跡西白島地点出土遺物実測図(4)(S=1:4)

IV ま と め

本遺跡の北東側に位置する城北駅北（旧西白島）交差点付近では、新交通システム（アストラムライン）の建設を含む一般国道54号改築工事に伴い、平成3～7（1991～95）年度に数次にわたって広島城関連遺跡の発掘調査が実施された。その結果、広島城の“北の郭”及び“搦手の外堀”の北西隅周辺に存在した櫓台や堀・護岸構造物等の状況が明らかとなった。ここではその成果を踏まえつつ、本遺跡の調査によって明らかになった事項を検討し、問題点について整理してみたい。

まず本遺跡の中心的な遺構である櫓台から見ていくことにする。調査区内には北東面石垣約13.1mと北西面石垣約9.8m及び裏込め石が遺存していた。石垣は約80°の急傾斜で直線的に立ち上がり、接地部から天端石までの高さは、城北駅北交差点内櫓台の調査事例等から推定して約4.5m程度であったと思われる。そしてその上には、江戸時代初期の状況を伝える『安芸国広島城所（絵図）』によると、入母屋造りの屋根を持った下見板張りの平櫓が建てられていた。平櫓の具体的な外観や構造等については、現在広島城二の丸の南西隅に復元されている櫓が参考となるであろう。なお、本遺構上の平櫓の平面規模に関して、「三間一尺二九間」とする古記録が残されている。この数値は、広島城内の建物についてその平面規模を逐一記載した図面によるものであるが、過去の発掘調査で得られた遺構の規模とは一致しない部分もあり、参照する場合は慎重に扱う必要がある。仮にこの記載に従えば、本櫓は1間を6尺5寸（約200cm）として梁間約6.2m×桁行約18.0mの建物であったということになる。

次に土塁について触れてみたい。広島城では、城域全体に限らず石垣で囲われていたわけではなく、中堀や外堀に面した場所では城門両脇や櫓台等の要所だけに石垣を築きそれ以外は土塁となっている箇所が多かった。この土塁に関しては、これまで『安芸国広島城所（絵図）』や『広島城下絵屏風』等の絵図・絵画資料や幕末・明治期の古写真等によってその外観が知られるにすぎなかった¹⁾。それが今回の調査により、部分的ではあるが内部構造の詳細な情報を得ることができたことは大きな成果といってよいであろう。以下にその要点を述べることにする。土塁は低い基礎石垣の上に堤状の傾斜面が載る構造となっていたようであるが、その斜面部分は絵画の描写や写真画面からは草に覆われているように見えるため、土固めであったものと漫然と想像されていた。しかし調査の結果、堀に面した側を中心に拳程度の石材による石積み構造となっており、また内部深くには土の層が見られることも判明したのである。この石積みの表面が常時露出していたとは考えにくく、表面に薄く覆い土が被せられていたか、あるいは自然堆積土に覆われていたとも思われるが、その点は調査では確認できなかった。なお、検出された基礎石垣の上端が水平にそろっていない点や、本遺構と同様な土塁であったと考えられる中堀北面の調査事例と比較して基礎石垣が低い（中堀例の1.5m内外に対して約1.0m）点等から、基礎石垣上部は崩されて本来の状況よりも低くなっており、必然的にその上の石積みも改変されている可能性は捨て切れない。しかしながら、基礎石垣と傾斜面（内部はおそらく石積み）から成る土塁の構造を知る上で、本遺構は多くの情報を提供したことに変わりはない。

さらに絵画資料等でも明らかかなように、土塁上には防御機能を高める目的で土塀が設けられてい

た。広島城の土堀は、本丸・二の丸といった主要郭や城門脇等の防御上重要な場所では下見板張りで瓦葺きの屋根とし、その他の外郭では総塗籠めで板葺きであったという（太丸編1995）。本遺構はこのうち後者に含まれる。こうした土堀を設置するにあたり、土塁上には何らかの基礎が施されたものと考えられる。その基礎にあたるのが、本遺跡で用途不明石列とした遺構ではないかと当初想像された。しかし、“搦手の外堀”側である北西方向に面を向けて設置してあり、また上面が水平ではなく、奥行きが約30cmと狭い等の点からそれは考えにくい。あるいは本遺構は、土塁を補強するために土塁上部に築かれた“鉢巻石垣”の一部とも考えられるが、そうした補助的の石垣がこの箇所に設けられていたことを示す史料は今のところ見当たらず、確証を得ない。さらには、城郭廃絶後に何らかの目的で設けられた近代建造物の一部である可能性も捨て切れない。このようにいくつかの用途が想定されるものの、遺構に伴う遺物がなく、石組み等の観察による限られた情報だけでは本遺構の時代や築造目的を特定するには至らず、今後の検討課題として残された。

最後に、平成3（1991）年度の調査によって確認された“北の郭”北西隅櫓台と本遺跡との位置関係について見ておきたい。まず本調査において、櫓台の北西隅部が検出できたことは重要なポイントである。つまり、このことによって既知の北西隅櫓台との位置関係をより正確にとらえることが可能となり、全城域からすればわずかな範囲ではあるものの、2基の櫓・土塁及び堀という城郭の重要な構成要素について連続した空間の中で把握することができたのである。その具体的な位置関係を探る上で参考となったのが、明治時代初期の測量図『広島城之図』である。細かく見ていくと、まず本図では2基の櫓の軸方向は完全には一致しておらず、約11°のずれをもって表現されている。このことは検出された遺構においても、北西隅櫓台北西面石垣の軸方向がN50.5°E、本遺構が同じくN61°Eと実際に10.5°のずれが見られたことによって確認された。また北西隅櫓台の南西隅と本遺構の北西隅間の距離は、『広島城之図』では27.6間（約50.2m）、検出遺構では約48.6mとこれもほぼ一致している。このように図と実際の数値との整合性が確認されたことは、広島城の縄張りを知る唯一無二の測量図とされてきた『広島城之図』の評価をさらに高める結果ともなったといえる。

以上、調査結果について検討しつつ本遺跡の旧状復元も試みてみたが、解明された点はわずかであり、むしろ新たに出てきた問題点の方が多かったことは否めない。しかしこうした成果の蓄積の中から、かつての広島城の様相はもちろん、それを築造し、維持し、支えてきた人々の姿や彼らを取り巻く社会情勢にまでも迫る道筋が導き出せるものと考え、今後の調査事例の増加に期待するものである。

注

- 1) 『広島城下絵屏風』（広島城蔵）は、文化年間（1804～18）頃の広島城下の様子を伝える数少ない絵画資料の一つである。八丁堀付近には、城域の東縁に設けられていた京口門と櫓群及びそれらを連結する土塁・土堀が描かれており、堀に面してそれらが建ち並ぶ姿は本遺跡の旧状を彷彿とさせる。また古写真としては、巻頭図版3が参考となる。なお、土塁の遺構としては広島高等裁判所北側に一部遺存しているが、未調査である。

参考文献

- 大室謙二編1995『広島城関連遺跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団
桑田俊明1980『広島城外郭櫓跡発掘調査概報』広島県教育委員会
篠原達也編1997『広島城外堀跡城北駅北交差点地点発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団
篠原達也編1999『広島城外堀跡紙屋町・大手町地点』財団法人広島市文化財団
太丸伸章編1995『歴史群像名城シリーズ⑨ 広島城』学習研究社
多森正晴編1992『広島城中堀跡発掘調査報告』財団法人広島市歴史科学教育事業団
多森正晴編1993『広島城外堀跡西白鳥交差点地点』財団法人広島市歴史科学教育事業団
三浦正幸1999『城の鑑賞基礎知識』至文堂

図 版



広島城遺跡西白島地点全景



a 広島城遺跡西白島地点遺構検出状況（北東から）



b 広島城遺跡西白島地点遺構検出状況（北西から）



a 檜台北東面石垣検出状況（北東から）



b 檜台北東面石垣完掘状況（東から）



a 檜台北東面石垣完掘状況（北から）



b 檜台北東面石垣根石張り出し状況（北から）



a 檜台北西面石垣完掘状況（北西から）



b 檜台北西面石垣完掘状況（西から）



a 土壘完掘状況（北西から）



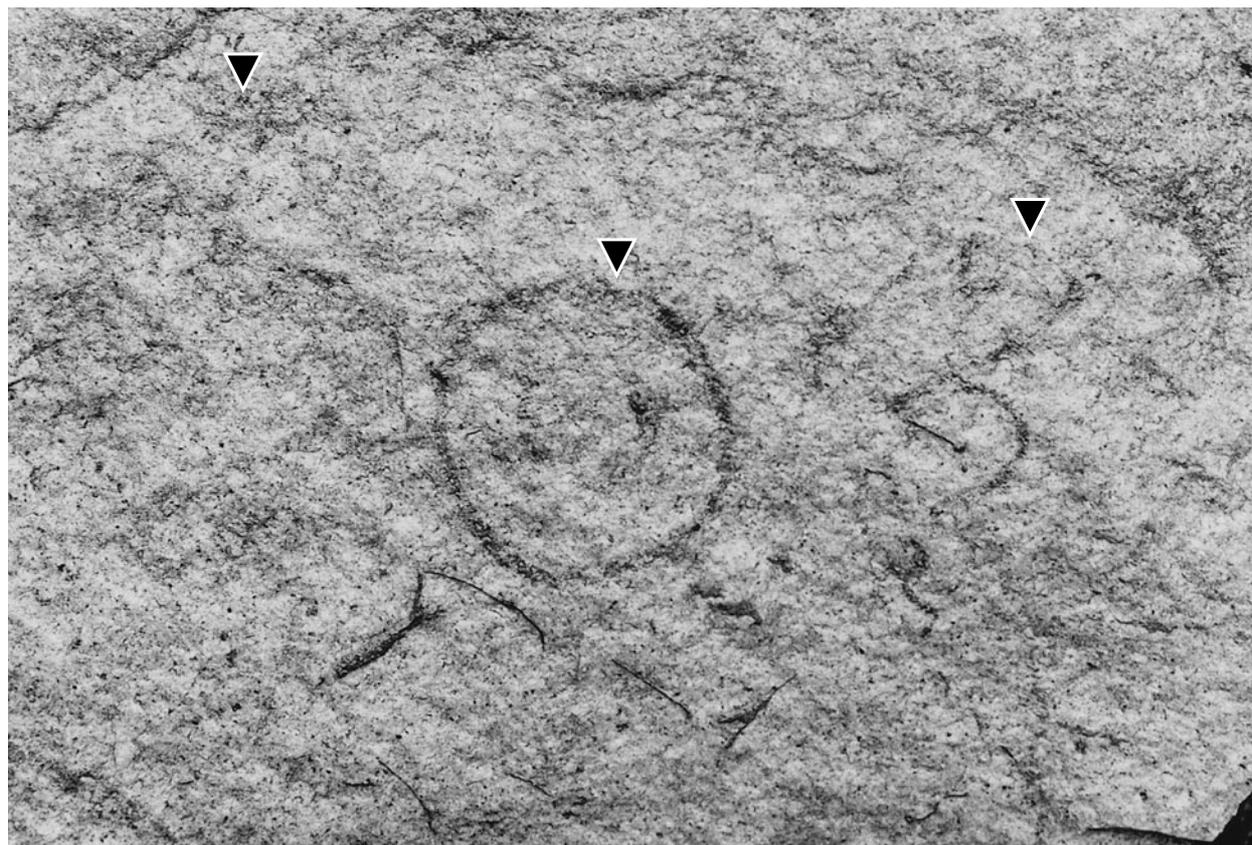
b 土壘完掘状況（北東から）



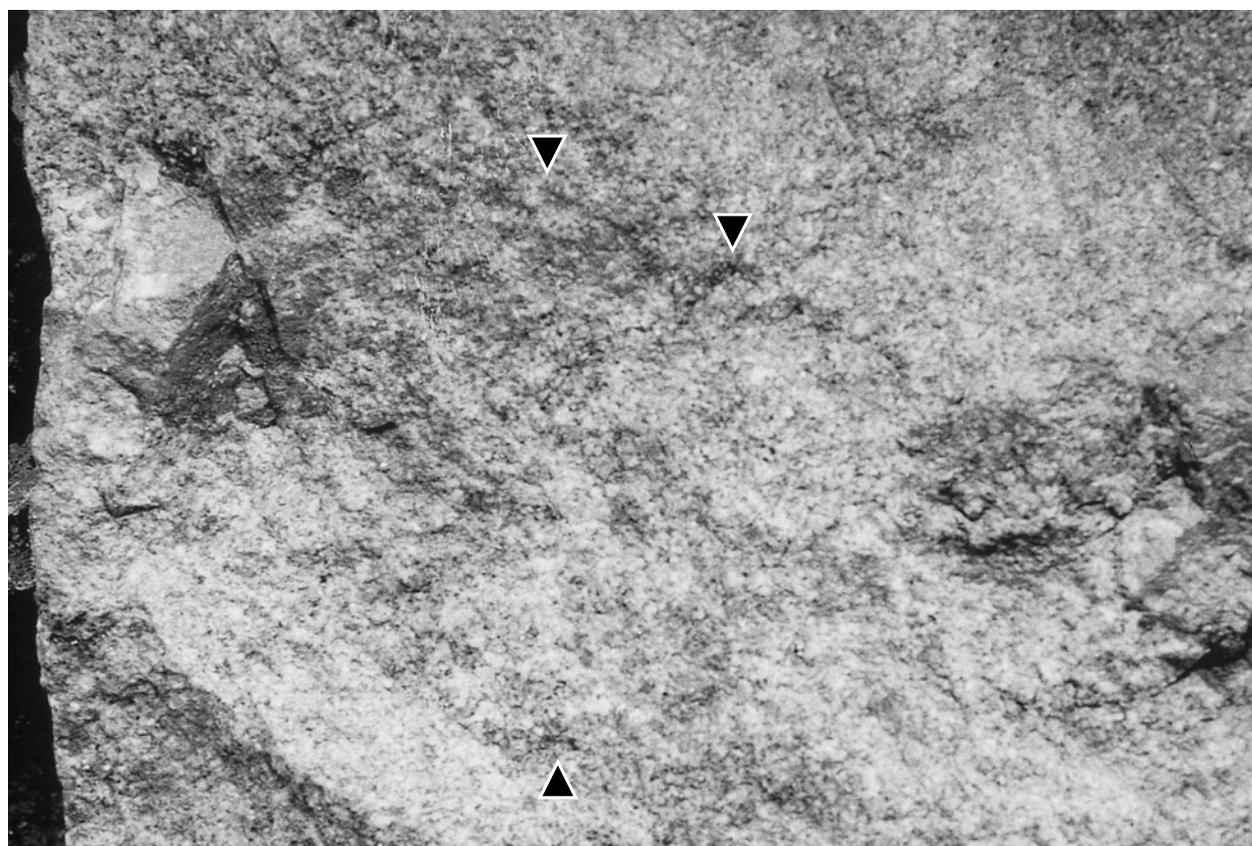
a 用途不明石列完掘状況（北西から）



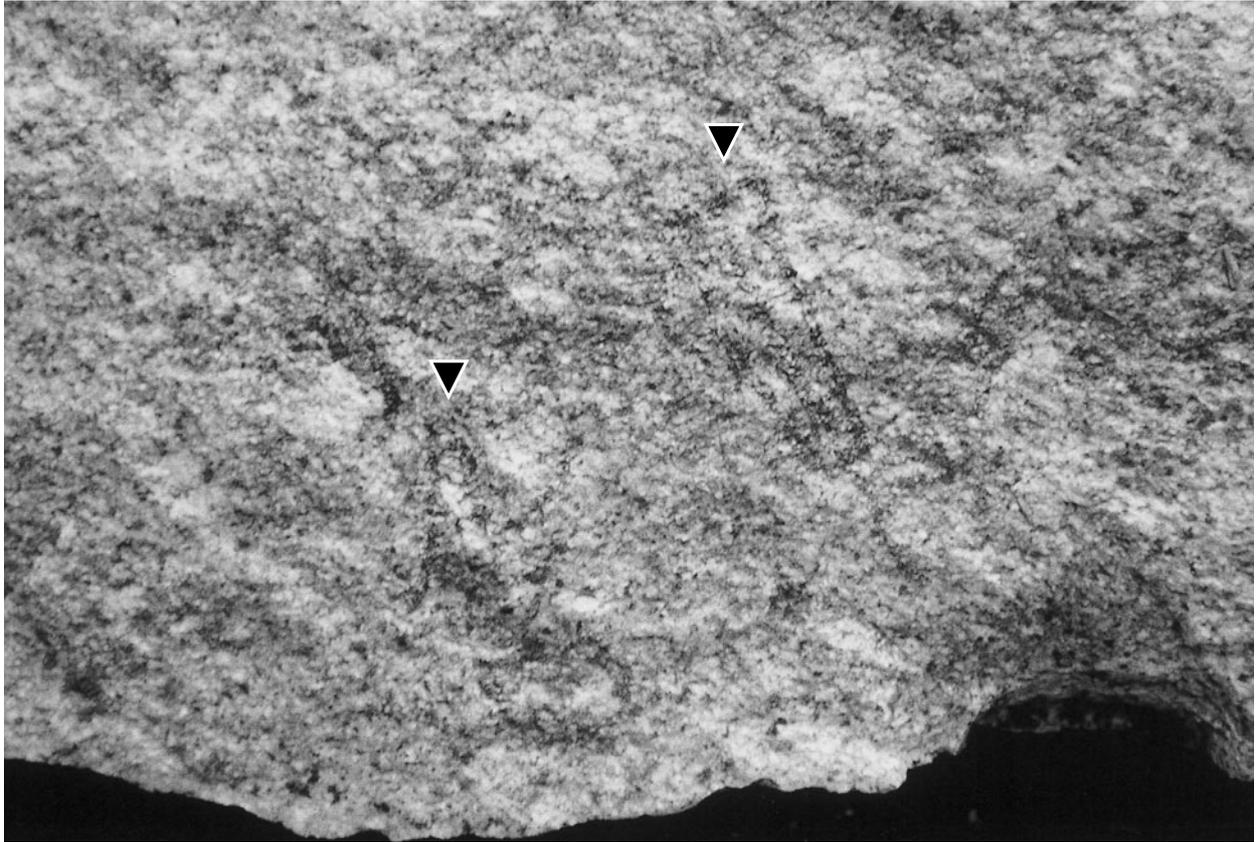
b 用途不明石列完掘状況（北東から）



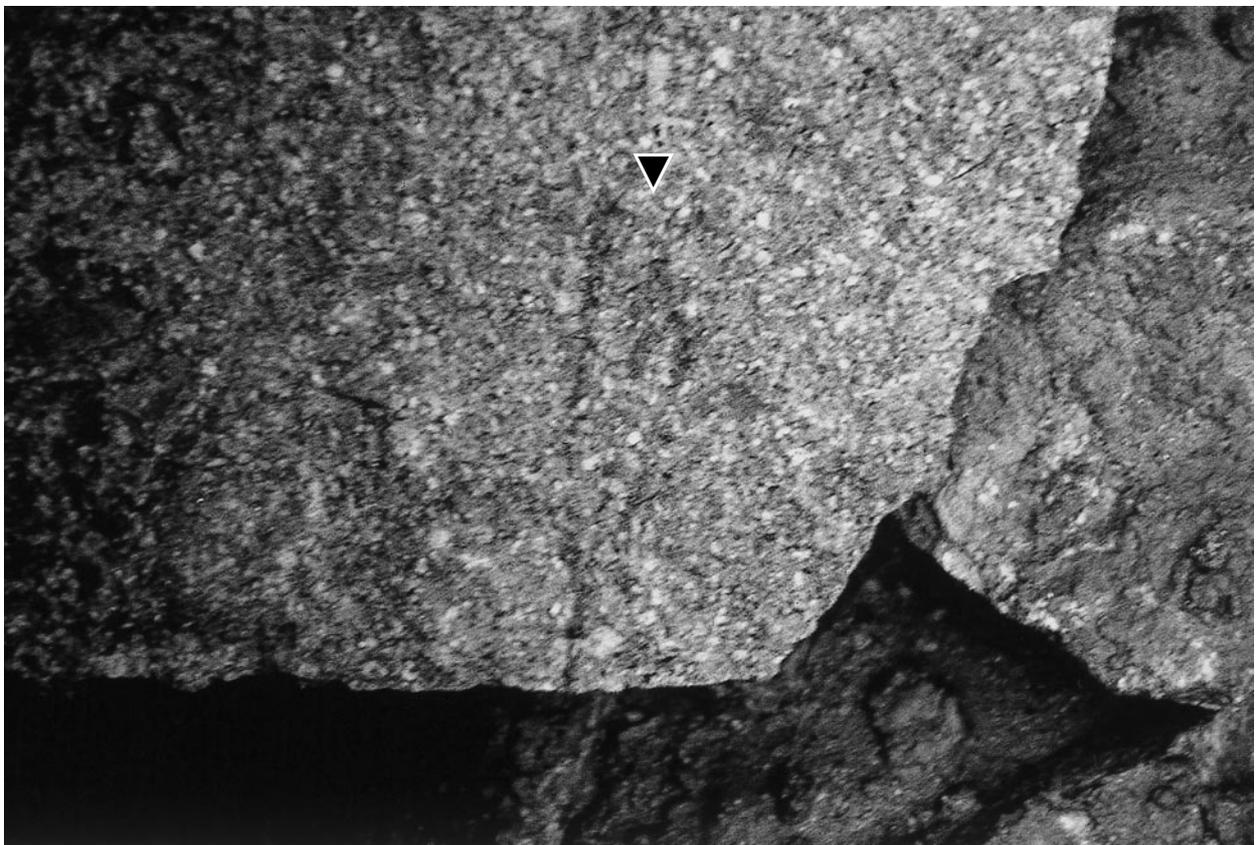
a 墨書石 a



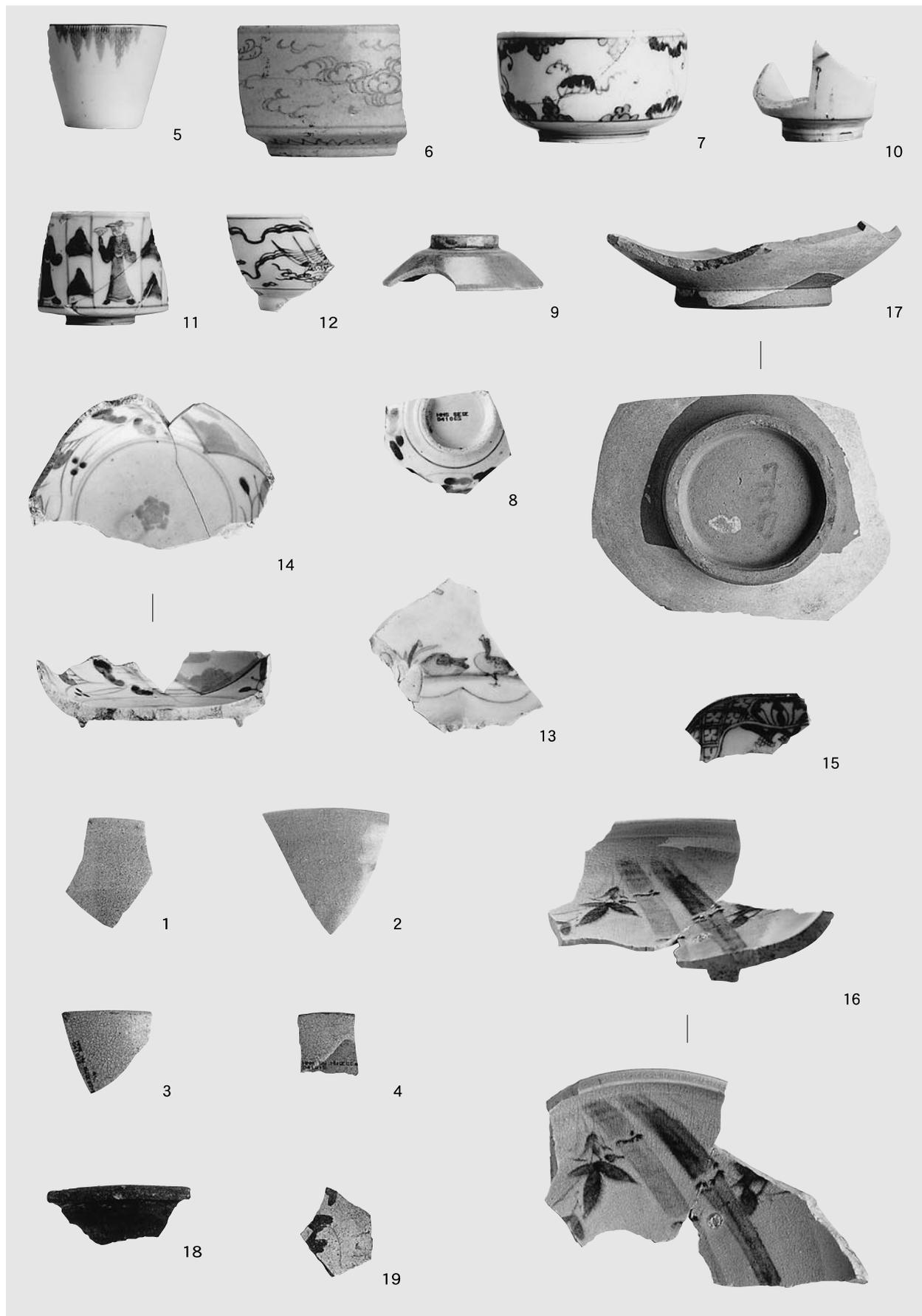
b 墨書石 b



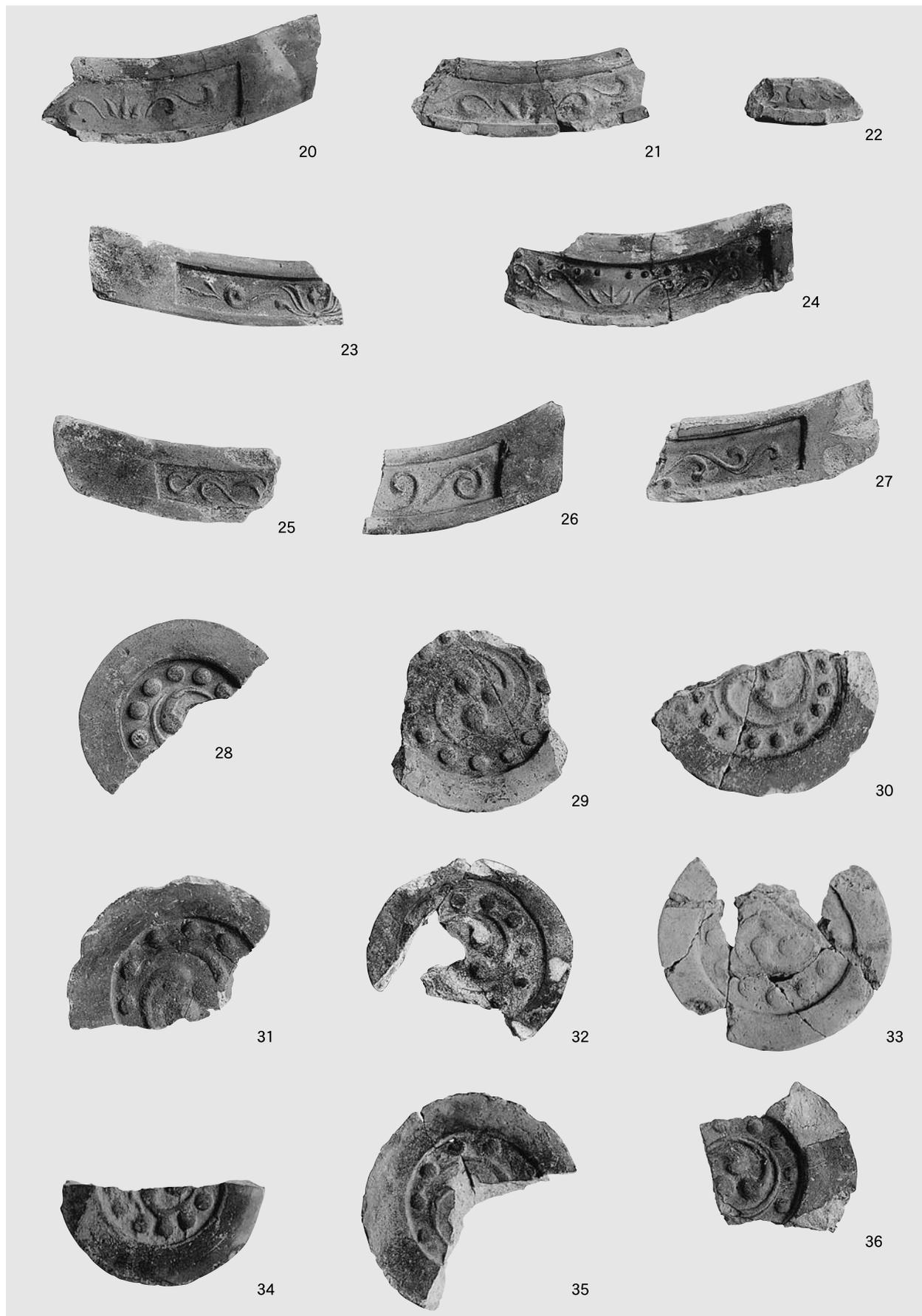
a 墨書石 c



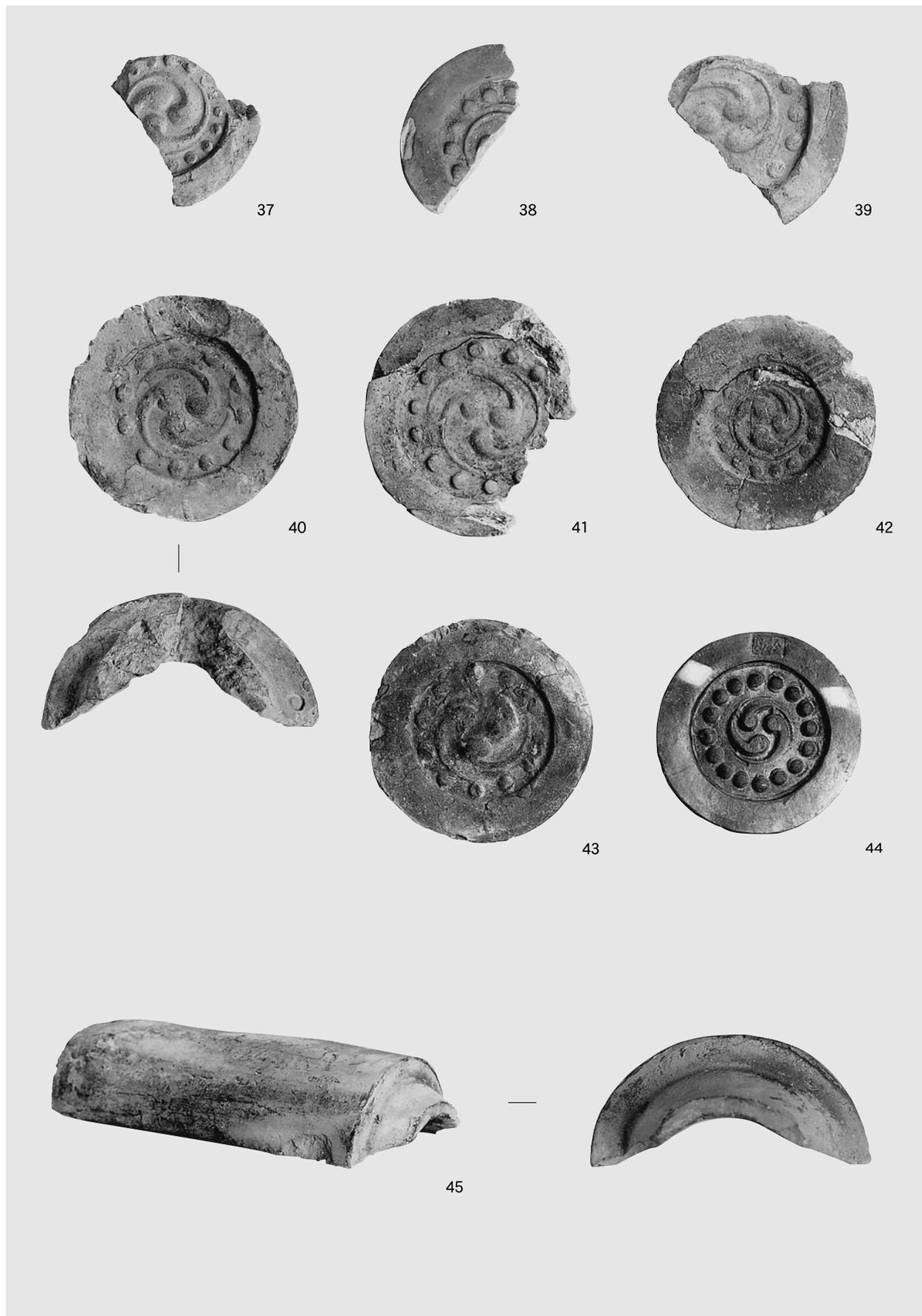
b 墨書石 c 下の墨書石



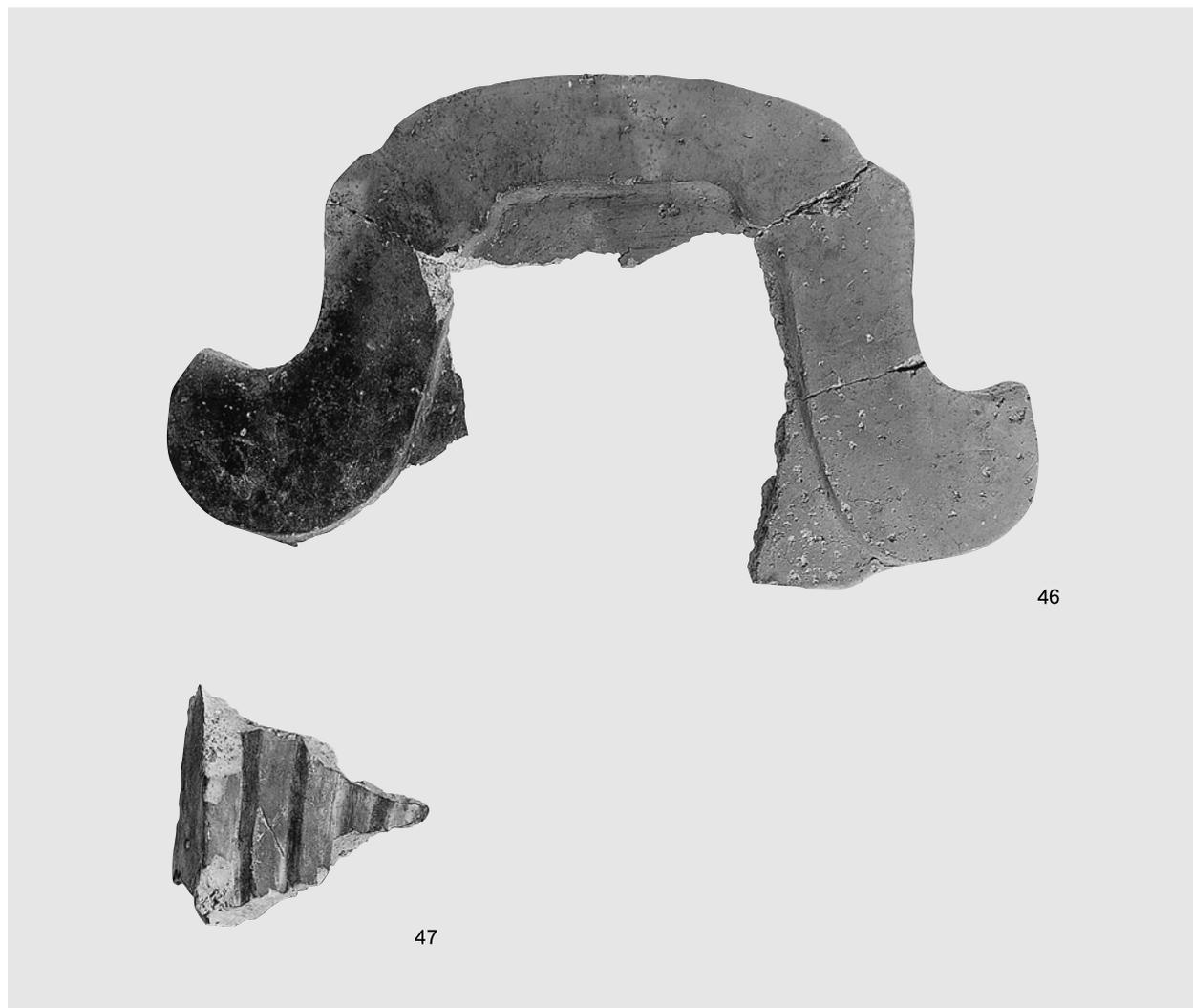
広島城遺跡西白島地点出土遺物(1)



広島城遺跡西白島地点出土遺物(2)



広島城遺跡西白島地点出土遺物(3)



広島城遺跡西白島地点出土遺物(4)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひろしまじょういせきにしはくしまちてん ひろしましなかくにしはくしまちようしょざい							
書名	広島城遺跡西白島地点 ー広島市中区西白島町所在ー							
副書名								
巻次								
シリーズ名	財団法人広島市文化財団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第12集							
編著者名	稲坂恒宏							
編集機関	財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課							
所在地	〒732-0052 広島県広島市東区光町二丁目15番36号							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
ひろしまじょういせき 広島城遺跡 にしはくしまちてん 西白島地点	ひろしましなか 広島市中 区西白島 町	34101	—	34° 24' 21"	132° 27' 30"	20040901～ 20041028	300m ²	マンション建 築工事に伴う 埋蔵文化財発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
広島城遺跡 西白島地点	近世城郭	江戸時代		櫓台 土塁 用途不明石列 堀		陶磁器 土器 瓦		

財団法人広島市文化財団発掘調査報告書 第12集

広島城遺跡西白島地点

—広島市中区西白島町所在—

2005年3月

編集発行 財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

〒732-0052 広島市東区光町二丁目15番36号

TEL (082) 568-6511

印刷 株式会社中本本店

〒730-0004 広島市中区東白島町13番15号

TEL (082) 221-9181

